

御津町埋蔵文化財発掘調査報告9

保存用5

鍛冶屋谷遺跡

1998年3月

岡山県御津町教育委員会

序

ここに、御津町教育委員会が実施した鍛冶屋谷遺跡の発掘調査報告書を上梓することになりました。

調査によって、堅穴住居、墓等が見つかり、土器等も整理箱40箱分出てきました。詳しいことは本文を見て頂くとして、人目を引く、華やかなものは見つかっていませんが、古代の人々の生活がしのばれるものであります。

この調査が歴史を考える資料としての一助をなせば幸いです。

なお、見つかった土器類は当町教育委員会で保管しています。学校教育の場等での活用を期待します。

最後になりましたが、鍛冶屋谷遺跡の調査は計画になかったことであり、地元の方の多大なご理解とご協力で実施できたと聞いています。深謝申し上げます。

1998年3月31日

御津町教育委員会
教育長 船守和夫

例　　言

- 1 本書は、岡山県営圃場整備事業五城北地区に伴い、岡山県岡山地方振興局の委託を受け、御津町教育委員会が書記 長谷川一英を担当者として実施した、「鍛冶屋谷遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は岡山県御津郡御津町大字新庄字鍛冶屋谷、字陰地に所在する。
- 3 現地での発掘調査は1989年6月27日から11月24日まで実施し、その後、断続的に遺物整理、本書の作成を行った。
- 4 調査、本書の作成にあたっては、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代吉備文化財センター、岡山県岡山地方振興局農林事業部耕地第2課、御津町役場、地元新庄地区の方々、御津町文化財保護委員会等から、ご指導、ご援助を賜った。深く感謝の意を表わします。
- 5 出土遺物、図面、写真等は御津町教育委員会で保管している。
- 6 本書の執筆、編集は長谷川があたった。

凡　　例

- 1 遺構実測図の高度はすべて海拔高度である。
方位は図1～3が真北、他が磁北である。鍛冶屋谷遺跡附近の磁北方位は西偏約6°50'である。
- 2 遺物実測図の縮尺率は、土器1/4、石器、鉄器1/3である。土器実測図の断面が白色のものは縄文土器、弥生土器、土師器、黒色土器を、黒色のものは須恵器、陶器、磁器を、網点のものは瓦器、瓦質土器を示す。
- 3 実測図等の遺跡名は鍛冶屋谷(KajiYaDaNi)とし、その後に調査年度を示した。
また、遺物には、遺物の取り上げ単位ごとに、取り上げ年月日を優先して、01から登録番号を付与した。遺物の出土地点、出土年月日等は別途作成した遺物台帳に記録し、遺物への注記は『KJY89—登録番号』のみとした。
- 4 遺物の取り上げ、本書の記述に際して、遺構名に以下の略号を用いた。

SB……堅穴建物

SD……溝・流路

SK……土壤

SP……柱穴・ビット

各遺構種別に、検出順に01から遺構番号を付与し、遺構名の後に示した。本書においては、調査時に付与した遺構番号をそのまま用いたため、番号が入り乱れている部分がある。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 地理的・歴史的環境	1
II 調査の経緯と経過	4
1 調査に至る経緯	4
2 調査日誌	4
III 調査成果	7
1 はじめ	7
2 1トレンチ	7
3 2・3トレンチ	10
4 4トレンチ	23
5 5トレンチ	26
6 6トレンチ	35
IV まとめ	40
報告書抄録	52

挿 図 目 次

図 1 御津町位置図	1
図 2 調査地周辺遺跡分布図	3
図 3 鎌冶屋谷遺跡推定範囲・調査地位置図	5
図 4 トレンチ配置図	6
図 5 1トレンチ出土遺物実測図	7
図 6 1トレンチ南壁上層断面図	8
図 7 1トレンチ第1遺構面平面図	9
図 8 2・3トレンチ第4遺構面平面図	11~12

図9	2トレンチ北壁土層断面図	13
図10	SK10平面図・断面図	14
図11	2トレンチ出土遺物実測図(1)	16
図12	2トレンチ出土遺物実測図(2)	17
図13	3トレンチ出土遺物実測図(1)	18
図14	3トレンチ出土遺物実測図(2)	19
図15	3トレンチ出土遺物実測図(3)	20
図16	3トレンチ出土遺物実測図(4)	21
図17	4トレンチ北壁土層断面図	24
図18	4トレンチ第1遺構面平面図	25
図19	4トレンチ出土遺物実測図	25
図20	5トレンチ東西断面北壁土層断面図	26
図21	5トレンチ第2遺構面平面図	27
図22	SB01・02平面図・断面図(1)	28
図23	SB01・02断面図(2)	29
図24	SK37平面図・断面図	29
図25	SK53平面図・断面図	30
図26	5トレンチ第3遺構面平面図	32
図27	5トレンチ出土遺物実測図(1)	33
図28	5トレンチ出土遺物実測図(2)	34
図29	6トレンチ北壁土層断面図	35
図30	6トレンチ第1遺構面平面図	36
図31	6トレンチ第2遺構面平面図	37
図32	6トレンチ出土遺物実測図(1)	38
図33	6トレンチ出土遺物実測図(2)	39

図版目次

図版1	調査地遠景（西から）	41
図版2	調査地遠景（北西から）	41
図版3	1トレンチ第1遺構面（北から）	42

図版 4	1 トレンチ第 1 遺構面（南から）	42
図版 5	2 トレンチ第 3 遺構面（北から）	43
図版 6	3 トレンチ第 3 遺構面（北から）	43
図版 7	2 トレンチ第 4 遺構面（北から）	44
図版 8	3 トレンチ第 4 遺構面（北から）	44
図版 9	2 トレンチSK10土器出土状況（西から）	45
図版10	2 トレンチ凹凸（西から）	45
図版11	4 トレンチ第 1 遺構面（南から）	46
図版12	5 トレンチ第 1 遺構面（北から）	46
図版13	5 トレンチ第 2 遺構面（北から）	47
図版14	5 トレンチ第 3 遺構面（南から）	47
図版15	5 トレンチSB01・02（東から）	48
図版16	5 トレンチSK37土器出土状況（西から）	48
図版17	6 トレンチ第 1 遺構面（北から）	49
図版18	6 トレンチ第 2 遺構面（北から）	49
図版19	出土遺物(1)	50
図版20	出土遺物(2)	51

I 地理的・歴史的環境

岡山県を南流する三大河川のうち、中央のものが旭川である。御津郡御津町はその中流域に、1955年の町村合併で誕生した面積約114km²、人口約11,000人の町である。主要産業は水稻を中心とする農業で、近年まで、静かな農村であったが、岡山空港、山陽自動車道岡山インターチェンジの開業、県・町営工業団地の造成、県都岡山市のベッドタウンとしての宅地開発等によつて、その姿は変貌しつつある。

町域の約77%は山林である。標高200~500mの山地の間を流れる河川沿いに平地が形成され、遺跡の多くもそこに立地している。

鍛冶屋谷遺跡は旭川の支流の新庄川と松撫山との間の標高60~80mの平地に立地している。ここは旧赤磐郡五城村で、その地質の大部分は花崗岩質である。風化によって、いわゆるマサ土が生成されていて、出土した土器にも含まれている。遺跡の現状は水田、宅地である。

鍛冶屋谷遺跡周辺の遺跡としては、北接する新庄尾上遺跡、数基の古墳、『五城』の由来である山城跡が知られていたのみであった。近年、圃場整備によって、この鍛冶屋谷遺跡を始め、平地のほとんどに遺跡が存在することが明らかになって来た。



図1 御津町位置図

縄文時代の遺跡としては、平岡西遺跡から早期の土器片が出土している。寺部遺跡、伊田沖遺跡から後・晩期のものが出土している。

弥生時代の遺跡は、縄文時代から続いて營まれたものの他、年次遺跡、矢知遺跡、赤鉢遺跡、新庄原遺跡と数多く存在している。これらの遺跡は以降も引き続き營まれている。

古墳は鍛冶屋谷遺跡の南に瀬戸古墳が知られているのみであるが、今回の調査で多数の埴輪片が出土していることから、未知の古墳の存在が考

えられる。また、南西1kmの所に、峠越えの道を挟む様に、前方後円墳の天神鼻1号墳、八ツ塚古墳が存在している。

古代になると、赤鉢遺跡から奈良時代の土器が、寺部遺跡から円面鏡が、平岡西遺跡から綠釉陶器が出土している他、多くの遺跡から輸入陶器が出土している。

中世には、御津町域が交通の要地であったことから、県下でも有数の規模を有する金川城を始め、多くの山城が築かれている。鍛冶屋谷遺跡周辺にも、背後の松撫山山頂に松撫城、矢知城、平岡西城、西谷城等多くの山城が築かれている。

- | | |
|--------------|--------------------------|
| 1 火の釜古墳 | 22 新庄原遺跡 |
| 2 佐野古墳 | 23 鍛冶屋谷遺跡 |
| 3 平岡西城 | 24 天神鼻1号墳（前方後円墳 全長20.5m） |
| 4 年次遺跡 | 25~27 天神鼻2~4号墳 |
| 5~8 一本松1~4号墳 | 28 八ツ塚古墳（前方後円墳 全長33m） |
| 9 赤鉢遺跡 | 29 瀬戸古墳 |
| 10 矢知城 | 30 松撫城 |
| 11 矢知遺跡 | 31 塚の谷遺跡 |
| 12 須道山古墳 | 32 宅美池遺跡 |
| 13 八幡神社古墳 | 33 上伊田遺跡 |
| 14 鍛冶久古墳 | 34 宇那山古墳 |
| 15 平岡西遺跡 | 35 祇園古墳 |
| 16 天狗古墳 | 36 宇那山城 |
| 17 熊野神社古墳 | 37 伊田沖遺跡 |
| 18 經畔古墳 | 38 岩井山古墳群 |
| 19 寺部遺跡 | 39 岩井山遺跡 |
| 20 新庄尾上遺跡 | 40 酒屋谷遺跡 |
| 21 西谷城 | |



図2 調査地周辺遺跡分布図

II 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

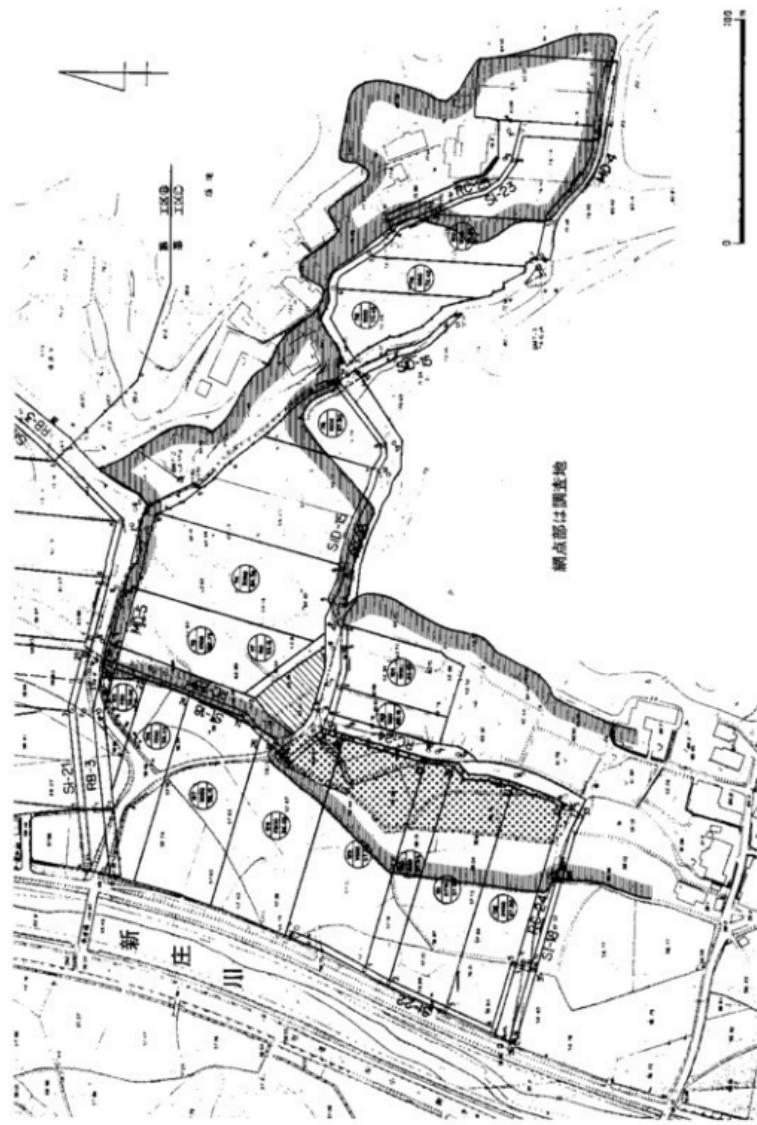
1985年、県営圃場整備事業五城北地区が始まった。それに先立って、岡山県教育委員会が、周知の遺跡である宅美池遺跡、塚の谷遺跡、伊田沖遺跡、新庄尾上遺跡の確認調査を実施し、保存対策がなされた。

89年度には、鍛冶屋谷、陰地地区において施工されることとなった。当該地区には周知の遺跡は存在しないが、新庄尾上遺跡に近接していることから、事前に遺跡の有無を確認することになった。御津町教育委員会は88年11月17日、予定地に重機で11ヶ所の試掘穴を設け、遺跡の有無を調査した。その結果、包含層が認められた。文化財保護法に基づき、発見届を通知し、鍛冶屋谷遺跡と命名した。町教育委員会、岡山地方振興局、御津町役場等は遺跡の扱いについて協議し、その保存に努めた。しかし、松撫山の西麓は、灌漑用水の関係から、南北方向の地割を東西方向に変更する計画であった。この部分は大きな設計変更は不可能で、陰地地区約4,000m²については削平せざるを得ず、岡山地方振興局は町教育委員会へ、発掘調査の実施を依頼してきた。町教育委員会では、88年11月より圃場整備事業に伴う新庄尾上遺跡の調査を開始していく、新たな調査は出来兼ねることであった。しかし、地元の強い要望から、再度、協議し、新庄尾上遺跡の範囲内の地権者のご理解によって新庄尾上遺跡の調査を中断して、鍛冶屋谷遺跡の調査を実施することになった。町教育委員会では文化財保護法第98条の2に基づく発掘届を通知し、89年6月27日から11月24日まで現地での調査を実施した。

2 調査日誌

6月27日	1・2トレンチ機械掘削開始	機材搬入	10月5日	4トレンチ調査終了
7月1日	1トレンチ調査開始		10月20日	3トレンチ調査終了
7月4日	1・2トレンチ機械掘削終了			5トレンチ調査開始
8月7日	2トレンチ調査開始		10月25日	6トレンチ調査開始
8月9日	1トレンチ調査終了		11月16日	6トレンチ調査終了
9月16日	2トレンチ調査終了		11月24日	5トレンチ調査終了 機材搬出
9月17日	3～6トレンチ機械掘削開始			
9月19日	3～6トレンチ機械掘削終了			
9月20日	3トレンチ調査開始			
9月21日	4トレンチ調査開始			

図3 新治屋谷道路推定範囲・調査地位置図



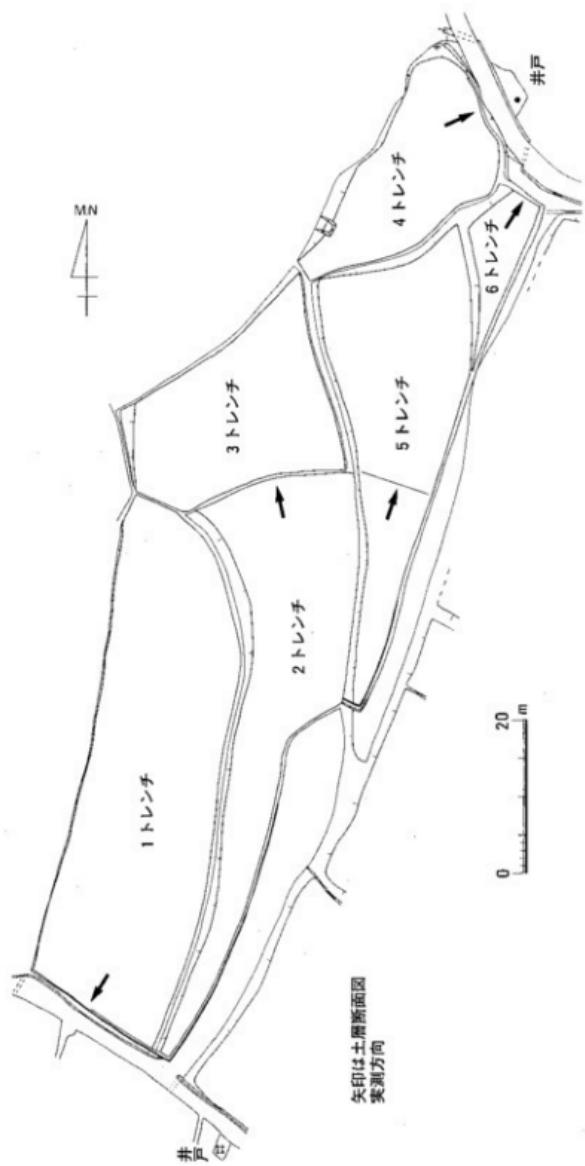


図4 レンチ配置図

III 調査成果

1はじめに

鍛冶屋谷遺跡の調査は、前章でも述べた様に、予定外のもので、調査期間も十分ではなかった。また、暑さと降雨に悩まされた。

調査に当たって、調査地内を既存の段差によって区画し、それぞれを1つのトレンチと考え、調査順に1～6トレンチとした。現耕作土層を重機によって掘削し、それより下層を人力で掘削した。検出した遺構面を検出順に第1遺構面、第2遺構面とした。

調査地は新庄川へ向けて、西へ傾斜している。表土面のレベルは58.8～61.6mである。水田として利用されていたため、それぞれの区画の地表面は平坦である。

2 1トレンチ

1トレンチは調査地の南西部に位置する。遺構面は地山面である。西へ傾斜している。レベルは58.3～58.6mである。

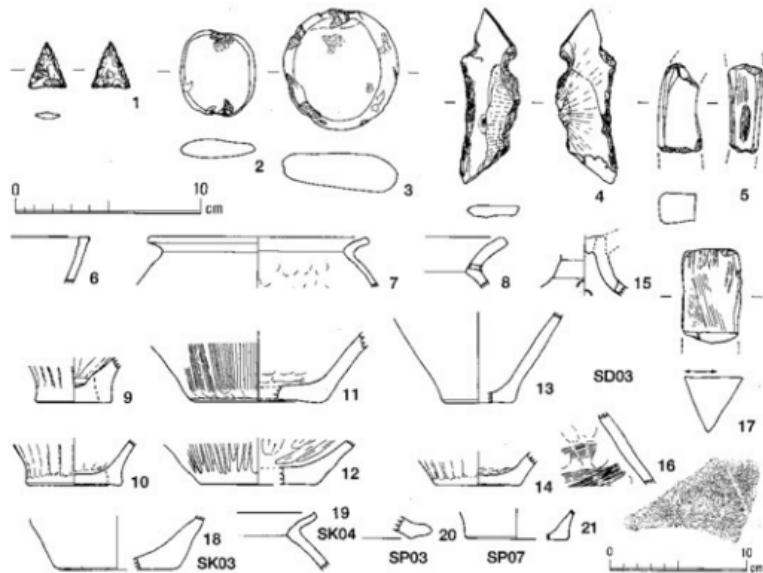


図5 1トレンチ出土遺物実測図

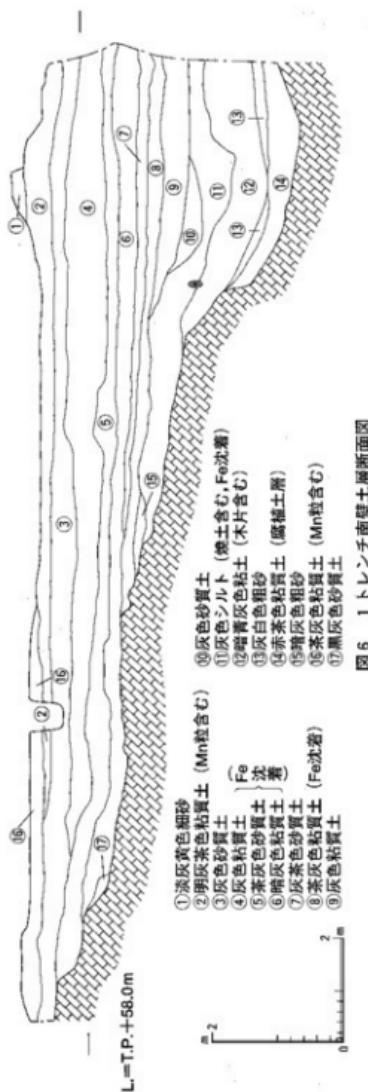


図 6-1 トレンチ南壁土層断面図

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等多様な遺物が出土した。1はサヌカイト製の石鏡である。2は砂岩製の石錐である。3は花崗岩製の磨石である。4はサヌカイト製の石匙である。5は断面四角形で、やや湾曲するものである。全体によく磨滅し、一部に擦痕が見られる。

遺構はトレンチ南半で溝、土壤、ピットを検出した。埋土からは主に弥生土器が出土した。

SD03はトレンチ南西角で検出した流路の一部である。底面の傾きから、北西へ流れていったようである。河岸では多数の杭跡が見られた。新庄川の旧河道の一部であろう。縄文土器、弥生土器が出土した。6は縄文土器口縁部である。端部はやや肥大し、刻み目が施されている。7・8は口縁部である。8は屈曲部に穿孔が見られる。9～14は底部である。15は高杯脚端部である。16は胸部である。刷毛目調整の後、櫛描きの多条文と波状文が施されている。17は砂岩製の砥石である。断面三角形で一面のみ擦痕が見られる。

SK03はトレンチ西半中央で検出した。長径1.3m、短径1.0m、深さ0.4m、平面不定四角形である。18の弥生土器底部1点が出土した。

SK04はトレンチ東半中央で検出した。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.1m、平面橢円形である。弥生土器が出土した。19は口縁部で、端部はわずかに摘み上げられている。

SP03はSK03の北東で検出した。径0.3m、深さ0.1m、平面円形である。20の弥生土器脚端部1点が出土した。

SP07はトレンチ東半中央で検出した3基の土壤の東端のものである。長径0.5m、短径0.3m、

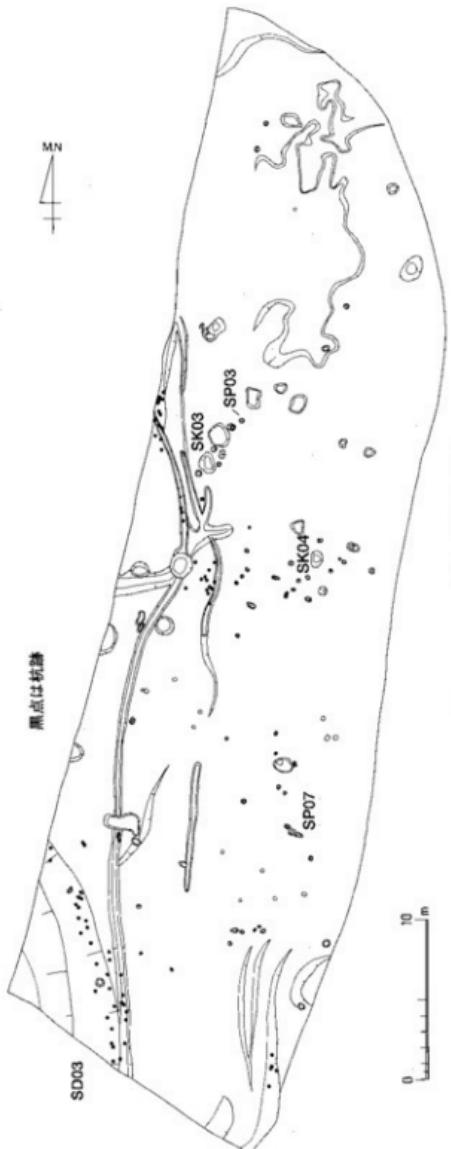


図7-1 トレンチ第1遺構面平面図

深さ0.2m、平面不定三角形である。弥生土器、土師器が出土した。21は底部である。

3 2・3 トレンチ

2・3 トレンチは調査地の中央部に位置する。現耕作土層を除いたところ、遺構面は同レベルのため、同時に報告する。遺構面は4面検出した。

第1遺構面は現耕作土層下の明橙色粘質土層を除いた面である。西へわずかに傾斜している。レベルは59.3~60.4mである。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、埴輪等多様な遺物が出土した。22は弥生土器の壺口縁部である。口縁内外面に篦描きの装飾が施されている。

遺構は3トレンチ東辺で2条の溝を検出した。幅0.3m前後、深さ0.1m前後である。埋土からは弥生土器が出土した。144・145はSD05から、146~148はSD06から出土した。

第2遺構面は2トレンチ北東、3トレンチ南半に施された厚さ0.3m前後の整地土層を除いた面である。ほぼ平坦で、レベルは59.0~59.1mである。

整地土層からは上層と同様、多様な遺物が出土したが、図示出来る物は無かった。

遺構は3トレンチ西端で1条の溝を検出した。

第3遺構面は明灰色系砂質土層を除いた面である。わずかに西へ傾斜している。レベルは58.8~59.4mである。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、備前焼、埴輪等が出土した。149は弥生土器の高杯脚柱部である。四周に穿孔がある。

遺構はトレンチ全面でまばらに土塊、ピットを検出した。平面四角形を呈するものが主である。埋土からは主に弥生土器が出土した。

SK09は2トレンチ北東角で検出した。長径1.8m、短径1.0m、深さ0.1m、平面不定四角形である。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。23は土師器の貼付け高台の底部である。24は須恵器の椀口縁部である。

SK19・20は3トレンチ東辺で検出した。長径0.5m前後、短径0.3m前後、深さ0.2m前後、平面梢円形である。弥生土器、土師器が出土した。150~154はSK19から出土した。150・151は口縁部である。150の内面には粘土の接合痕が見られる。152・153は底部である。152の底面周囲は高台状に突出している。155・156はSK20から出土した。155は口縁部である。156は高杯脚部である。脚柱部と脚裾部の境に1条の凹線が施されている。

SP13はSK20の西側で検出した。長径0.3m、短径0.2m、深さ0.3m、平面長円形である。157・158の他2点の小片が出土した。157は口縁部、158は底部である。

第4遺構面は茶色系砂質土層、灰色系砂質土層を除いた面である。西へ緩やかに傾斜してい

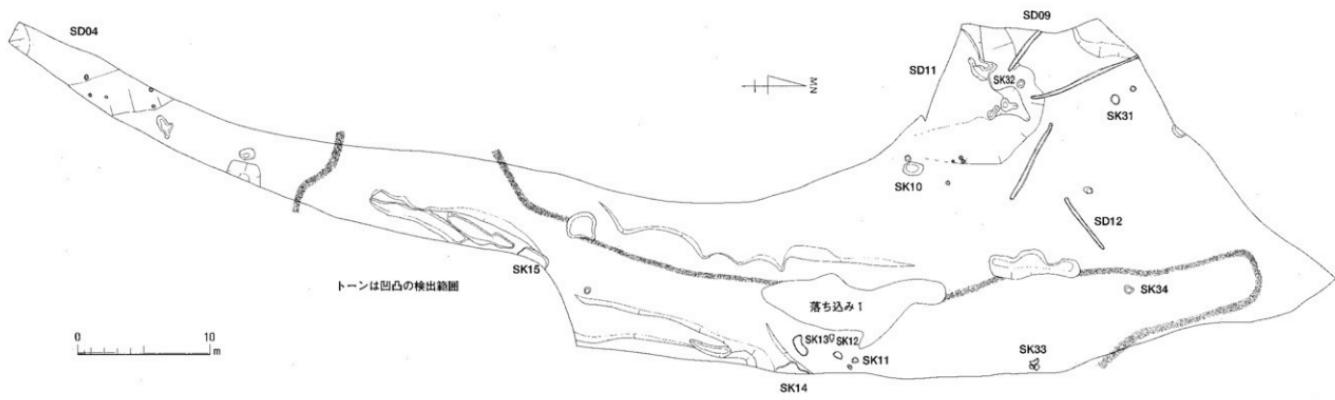


図8 2・3トレンチ第4塗構面平面図

る。レベルは58.4~59.3mである。

埋土からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、埴輪、石製品が出土した。**25**は花崗岩製の蔽石である。周縁に打撃痕が見られる。全体に良く磨滅している。**26**は泥岩製の磨製石包丁未製品である。左側の穿孔は表裏で位置がずれている。**27**は玄武岩製のものである。断面三角形を呈する。上面は磨滅し、下端は打製石器の刃部状になっている。くさびに使用されたのであろうか。**159~161**は縄文土器である。**159**は後期の鉢口縁部である。端部は外方にやや突出し、断面三角形を呈する。胎土は粗く、もろい。**160**は上げ底の底部である。胎土は粗く、もろい。**161**は後期の鉢口縁部である。波状口縁の突起部である。巻貝状の装飾が施されている。端面には縄文が見られ、内面にも4条の沈線が施されている。四ッ池式に位置付けられよう。**162**は砂岩製の磨製石斧である。刃縁は磨滅している。**163**は花崗岩製の磨石である。**164**は石鎌である。下辺に溝が複数見られる。**165・166**はサヌカイト製の石錐である。**167**はサヌカイト製の石錐である。錐部先端は磨滅している。**168**はサヌカイト製のくさび形石器である。上辺から打撃を加えた様で、下辺は磨滅している。**169**はサヌカイトの剥片である。**170**はサヌカイト製の石錐未製品であろう。下辺、内湾する部分に調整剝離が見られる。**171**はサヌカイト製の石錐である。**172**はサヌカイト製の小型石槍である。全体に磨滅している。

造構はトレンチ全面で流路、溝、土壤を検出した。埋土からは弥生土器を主に、土師器、須恵器等多様な遺物が出土した。

SD04は2トレンチ南端で検出した。深さ0.5mの流路である。北岸で5基のピットを検出した。南岸は検出していない。底面の傾きから北流していた様で、新庄川へ続くものであろう。

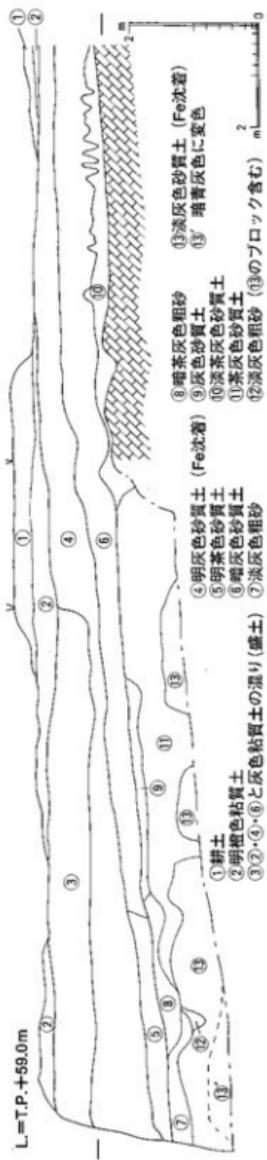


図9 2トレンチ北壁土層断面図

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、鉄滓が出土した。遺物は3層に分けて取り上げたが、時期的に大差無く、一時に埋没した様である。28～58は上層、59～94は中層、95～108は下層から出土した。

28～34は口縁部である。35は脚台部である。36は器台脚端部である。37は土師器小皿である。38・39は土師器の貼付け高台の底部である。40は瓦器の貼付け高台の底部である。高台は退化している。内面には暗文が見られる。41～58は須恵器である。41は鉢口縁部である。端部は屈曲して、外反している。42～51は椀口縁部である。52は東播系須恵器捏鉢の口縁部である。53～57は底部である。底面には糸切り痕が残存している。58は貼付け高台の底部である。高台は外方に踏ん張り、しっかりしている。

59は弥生土器底部である。60～74は土師器である。60・61は椀口縁部である。62は口縁部である。63は貼付け高台の小皿である。高台は退化し、底面は上げ底状を呈している。64～70は土鍋口縁部である。内外面とも刷毛目調整が施されている。71は貼付け高台の底部である。72～74は平底の底部である。75・76は瓦器小皿である。底部外面には指頭圧痕が残存している。75の内面には暗文が見られる。77は瓦質土器の土鍋口縁部である。78～93は須恵器である。

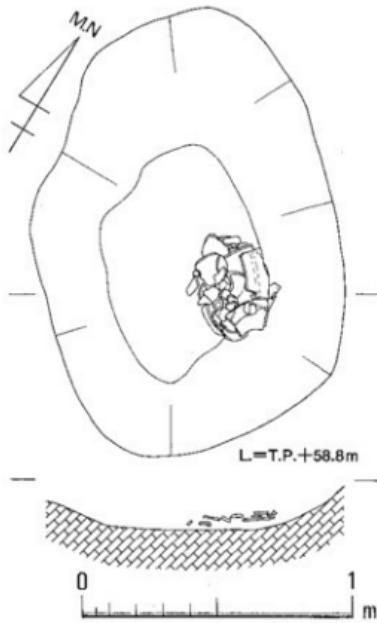


図10 SK10平面図・断面図

78～84は椀口縁部である。85～89は底部である。底面には糸切り痕が残存している。90は貼付け高台の底部である。高台は63のものと同様に退化し、底面は上げ底状を呈している。91～93は備前焼鉢である。表面は灰色を呈する。94は亀山焼底部である。表面は灰色、断面は白黄色を呈する。外面には成形時の圧痕が見られるが、内面は磨滅している。

95～97は弥生土器である。95・96は口縁部、97は底部である。98～101は土師器口縁部である。98・99は椀、100・101は土鍋である。103～107は須恵器である。103は蓋口縁部である。104は小型の鉢である。底部に高台をもつが、ほとんど機能していない。105～107は椀口縁部である。108は青磁の椀口縁部である。109は砂岩製の角状のものである。断面は不定六角形を呈する。先端は欠損している。

SD09はトレンチ北西部で検出した。調査区外へ延びる、幅0.4m、深さ3cmの溝である。縄文土器、弥生土器が出土した。**173**は脚部である。端部は外方に摘み出され、成形時の圧痕を残す。

SD12はトレンチ北部中央で検出した。長さ4.9m、幅0.3m、深さ0.2mの溝である。縄文土器、弥生土器、石鎌が出土した。**266**は口縁部である。端部は外方に拡張され、端面には5条の凹線が施されている。**267**はサスカイト製の石鐵未製品である。

SK10はトレンチ北西部で検出した。長径1.7m、短径1.1m、深さ0.3m、平面楕円形である。弥生土器が出土した。底面から**110**の破片が折り重なって出土した。壺棺墓の可能性がある。**110**は二重口縁の壺である。全体に垂みが著しい。胴部外面下半には粗い刷毛目調整が、上半には範磨き調整が、口縁部には横なで調整が施されている。**111**は高杯杯部である。**112・113**は口縁部である。**114**は鉢である。口縁部は上方に引き上げられ、外面には範磨き調整が施されている。

SK11～14はトレンチ東辺中央部で検出した。

SK11は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2m、平面ほぼ円形である。弥生土器4点が出土した。**115**は器台脚縫部である。

SK12は長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2m、平面長円形である。弥生土器が出土した。**116・117**は口縁部である。

SK13は長さ1.2m、深さ0.2m、平面やや瓢箪形である。弥生土器が出土した。**118**は器台脚縫部である。**119**は高杯脚柱部である。脚部差込み技法である。

SK14はトレンチ東辺中央で検出した。検出した範囲では、深さ0.2m、平面不定三角形である。縄文土器、弥生土器が出土した。**120**は口縁部である。端部は斜め下方に拡張されている。

SK15はトレンチ南辺南寄りで検出した。検出した範囲では、一辺2.1m、深さ0.1m、平面長方形である。弥生土器、埴輪が出土した。**121**は口縁部である。端部は上下に拡張され、端面には竹管文が施されている。**122～125**は底部である。**125**の底面は突出している。**126**は高杯脚柱部である。円筒状で、多条凹線文を施した後、穿孔している。**127**は高杯脚部である。**128**は口縁部である。胴部外面には範磨き調整が施されている。口縁部内外面には丹塗りが施されている。**129**は口縁部である。

SK31はトレンチ北辺で検出した。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3m、平面楕円形である。縄文土器3点、**174**の弥生土器底部1点が出土した。

SK32はトレンチ北西部で検出した。長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2m、平面楕円形である。弥生土器、土師器が出土した。**175**は口縁部である。端部は拡張され、端面には2条の凹線が施されている。**177**は土師器口縁部である。

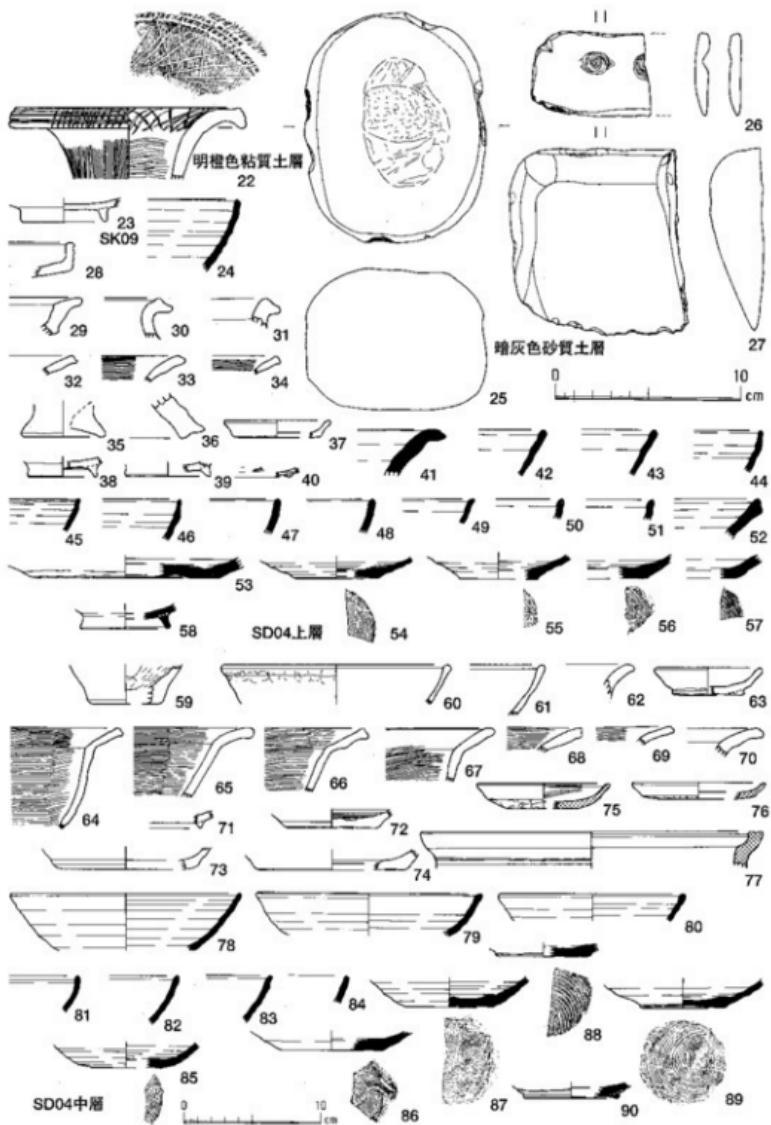


図11 2トレンチ出土遺物実測図(1)

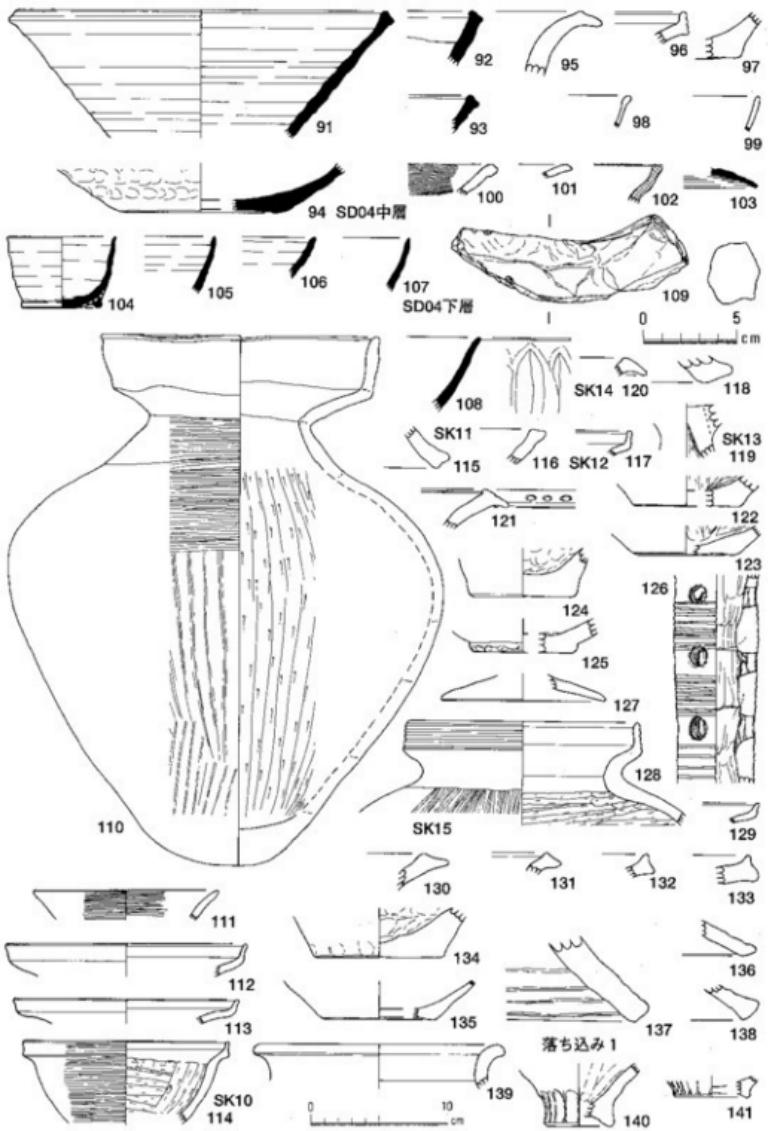


図12 2トレンチ出土遺物実測図(2)

SK34はトレンチ北東部で検出した。一辺0.6m、深さ0.1m、平面不定四角形である。弥生土器3点が出土した。**269**は底部である。

落ち込み1はSK11~14の西側で検出した。深さ0.1m程度の不定形の窪地である。埋土は暗灰色粘質土である。自然に形成されたものかもしれない。弥生土器、土師器、埴輪が出土した。130~133は口縁部である。端部が130・131は外方に、132・133は上方に摘み出されている。

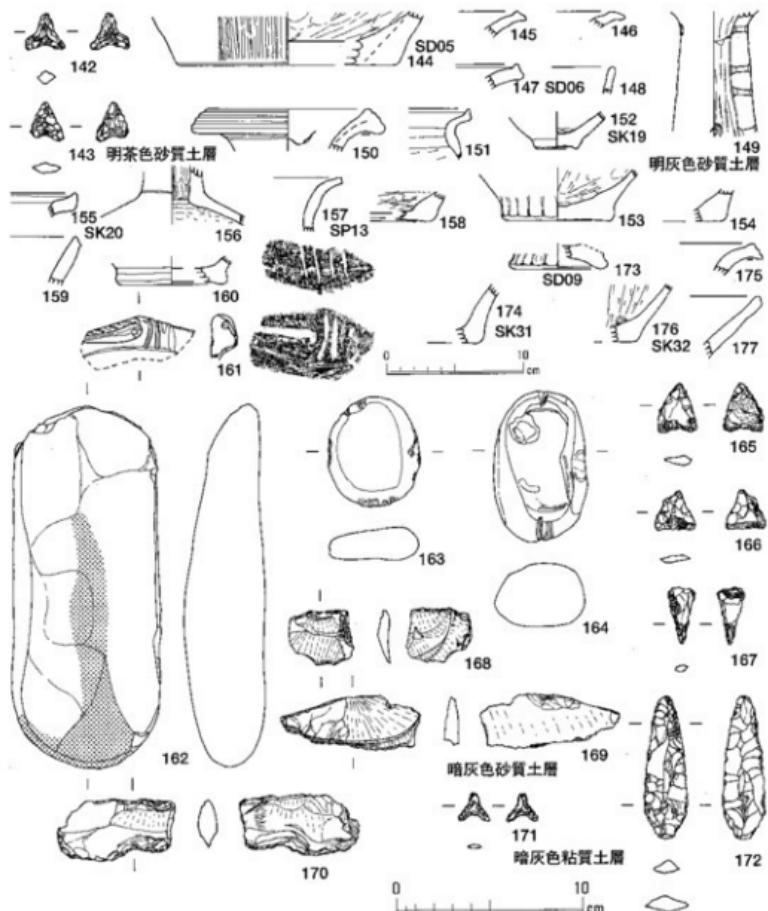


図13 3トレンチ出土遺物実測図(1)

134・135は底部である。136は高杯脚端部であろう。137・138は器台脚端部である。外面には凹線文が施されている。139は口縁部である。外反し、端部は丸く納められている。140は脚部である。端部は外方に摘み出されている。成形時の圧痕が残存している。141は底部である。底面周囲が高台状に摘み出されている。

凹凸としたのはトレンチ東半で検出した、暗灰色粘質土を埋土とする深さ5cm前後の様々な足跡状の小さな窪みが密集したものである。形状、方向等規則性は無く、その性格は不明である。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、埴輪、鉄滓が出土した。179～233は弥生土器である。179～207は壺、甕の口縁部である。183～188・190・194・204の端面には複数条の凹線文が施されている。196の端面には1条の波状文が施されている。208・209は口縁部である。口唇部下外面が突帯状に摘み出されている。210～222は壺、甕の底部である。219の底面周囲は高台状に突出している。胎土は精良である。223～229は高杯である。223は杯部口

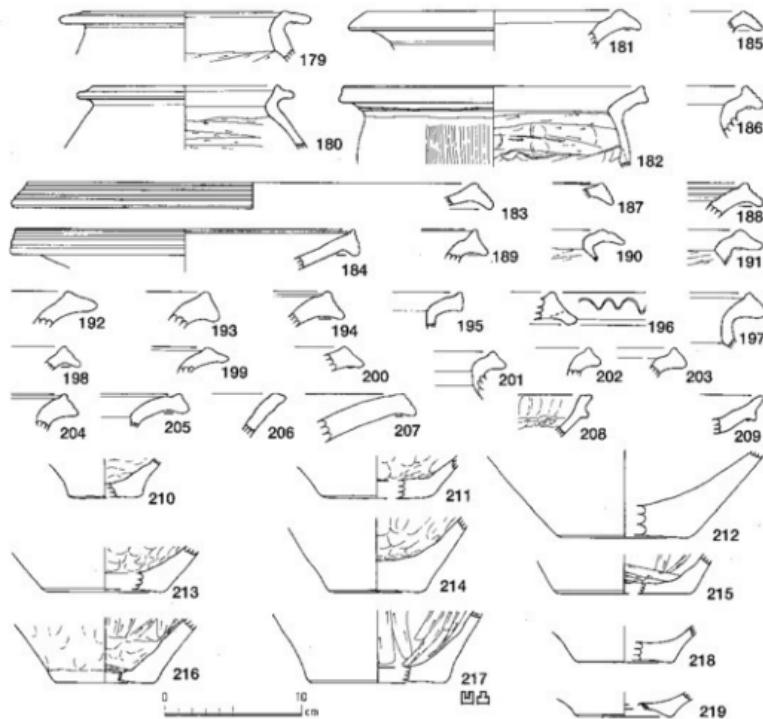


図14 3トレンチ出土遺物実測図(2)

縁部である。端部は下方へ折り曲げられ、端面には鋸歯文が描かれている。224は円板充填技法、225・226は脚部差込み技法である。227～229は脚柱部である。227は脚柱部と脚裾部の境に断面三角形の突帯をもつ。228は3ヶ所に穿孔があるが、貫通していない。229は内部に空間が無く、棒状である。230～233は器台の脚端部であろう。234～239は土師器である。234～238は口縁部である。239は底部である。底面は膨らみ、不安定である。240～244は須恵器である。240・241は腕口縁部である。242は平底の、243は貼付け高台の底部である。242の内面には黒褐色の付着物が見られる。244は高杯脚柱部である。245は縄文土器である。底面は上げ底である。246は黒色土器Aの柄である。247は円筒埴輪である。突帯は断面四角形でしっかり

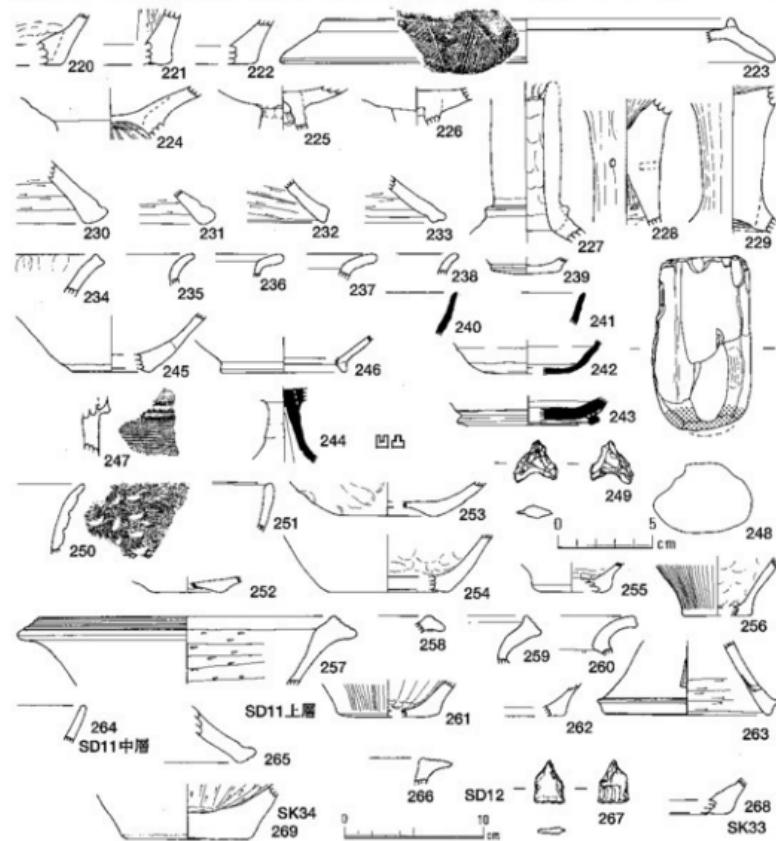


図15 3トレンチ出土遺物実測図(3)

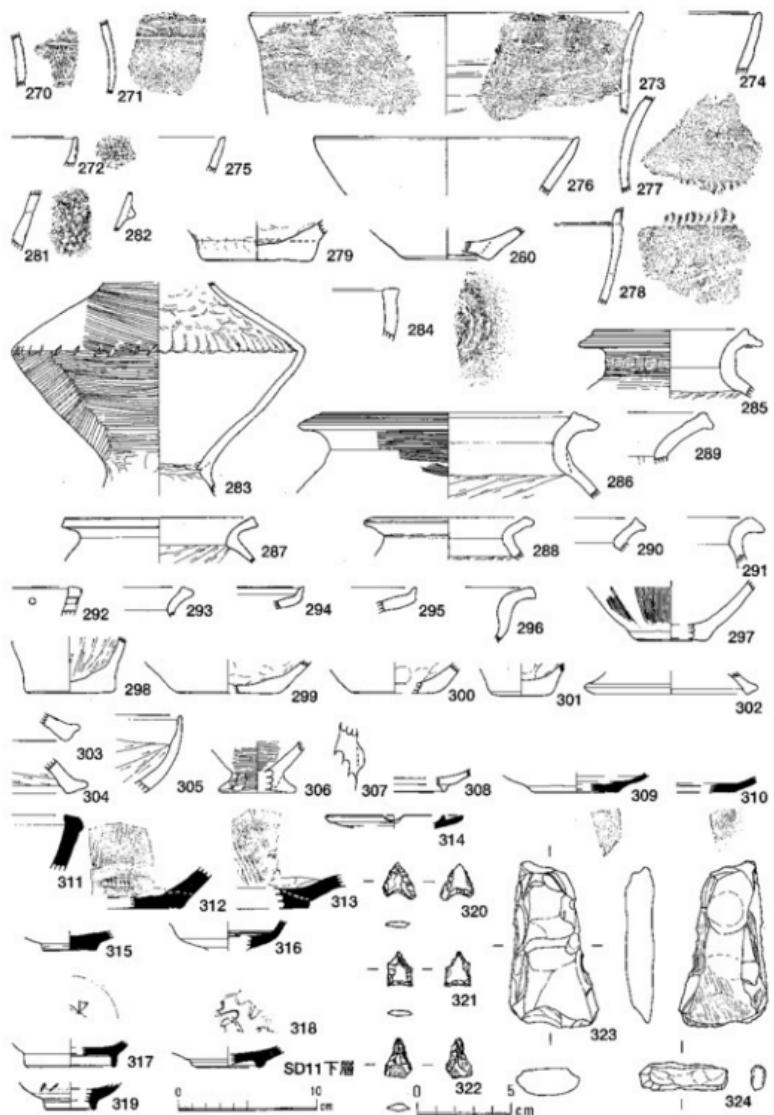


図16 3トレンチ出土遺物実測図(4)

している。横刷毛調整が施されている。248は粘板岩製の蔽石である。先端は磨滅している。

SD11はトレンチ北西部で検出した。一応、流路としたが、むしろ、低位部へ開いた谷状地形といえよう。底面は平坦で、南西方向に傾斜している。

遺物は3層に分けて取り上げた。上・中層からは縄文土器、弥生土器が出土した。下層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が出土した。下層の遺物量が多い。249～263は上層、264・265は中層、270～324は下層から出土した。

249はサヌカイト製の石礫未製品である。250～254は晩期の縄文土器である。250・251は口縁部である。250は外面に爪形文が施されている。251はやや内湾し、端部は丸く納められている。252～254は上げ底の底部である。253の外面には指頭圧痕が残存している。255～263は弥生土器である。255・256は底部である。256の外面には箒磨き調整が施されている。257～260は口縁部である。257・259の縁面には複数条の凹線文が施されている。261・262は底部である。263は高杯脚部である。透し穴は貫通していない。

264は晩期の縄文土器口縁部である。265は器台脚端部である。

270～272は後期の、273～280は晩期の『原下層式』の縄文土器である。270・271は胴部である。270は2条と1条の沈線が施され、2条の間には貝殻口唇部で刻み目状に施文されている。福田K2式に位置付けられる。271は沈線が2条施され、その間を凝縄文で埋めている。福田K2式の新しい時期のものである。272は口縁部である。刺突文が2列施されている。273～276は口縁部である。273は深鉢である。外面には条痕が見られる。274～276は鉢である。277は深鉢頸部、278は深鉢胴部である。頸部と胴部の境に爪形文が施されている。279・280は底部である。281は外面に押形文状の施文が見られる。282は外面に断面三角形の突帯をもつ。283～304は弥生土器である。283は脚付短頸壺である。胴部の稜線上に刻み目が施されている。底部に充填されていた粘土板は剥離している。284は口縁部である。端面は水平で、胴部外面には刷毛目調整が施されている。285～296は口縁部である。292は端部外面に刻み目が施され、穿孔されている。297～301は底部である。302～304は高杯脚端部である。305は鉢である。306は脚部である。箒磨き調整、丹塗りが施されている。307は円筒埴輪である。磨滅のため、詳細は不明である。308は土師器の貼付け高台の底部である。309・310は須恵器底部である。底面に糸切り痕が残存している。311～313は備前焼鉢である。314は赤茶色を呈する陶器の灯明皿である。315・316は青磁底部である。316は見込みに3条の凹線といわゆる猫搔き手文が施されている。317～319は磁器底部である。紺色系の染付けがなされている。317の断面には黒色の付着物が見られる。接着剤としての漆かもしれない。320～322はサヌカイト製の石礫未製品である。323は砂岩製の撥形の石鉢である。刃部には磨滅が見られる。324は鉄製刀子であろうか。銹化が著しい。

4 4 トレンチ

4 トレンチは調査区の北西部に位置する。遺構面は地山面で、東西方向の段差によって様相が異なる。上段は現耕作土層を除いた地山面で、平坦である。レベルは59.5m前後である。下段は淡青灰色砂質土層を除いた地山面で、トレンチ北部で検出したSD08へ向けて傾斜している。レベルは59.0～59.4mである。

淡青灰色砂質土層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等が出土したが、細片が多い。325は縄文土器剖部である。外面に3条の沈線が見られる。後期、福田K2式のものである。326はサヌカイト製の石鏃である。

遺構はトレンチ北部で流路を、南東部で数基の土壙を、南部で落ち込みを検出した。

SD08は北西への落ち込みかもしれないが、土層断面観察で流水堆積が見られたので流路とした。1 トレンチで検出したSD03と同様に新庄川の旧河道の一部であろう。弥生土器、土師器、須恵器、備前焼等が出土した。遺物は上下2層に分けて取り上げたが、時期差は無い。327・328は上層、329～332は下層から出土した。327は東播系の須恵質捏鉢口縁部である。328は備前焼擂鉢である。329は土師器口縁部、330は土師器の貼付け高台の底部である。331は須恵器底部である。底面には施切り痕が見られる。332は三足土鍋の足部である。

SK24はトレンチ北半中央で検出した落ち込みの一部である。弥生土器、備前焼が出土した。333は弥生土器の壺胴部下半である。外面には施磨き調整が施されている。334は備前焼の擂鉢口縁部である。

SK26はトレンチ南東部で検出した土壙群の一つである。長径1.5m、短径0.7m、深さ0.3m、平面長円形である。弥生土器、埴輪が出土した。335～337は弥生土器である。335は壺口縁部である。端部は外方に拡張され、端面には四線文が施されている。外面には残存部で9条の凹線が施されている。336は口縁部である。端部は外方に拡張されている。337は底部である。やや上げ底である。

SK28・29はトレンチ南部で検出した落ち込みの一部である。深さ0.4m程度である。弥生土器が出土した。338～340はSK28から、341はSK29から出土した。338は高杯杯部である。339・340は底部である。341は脚部である。成形時の圧痕が残存している。

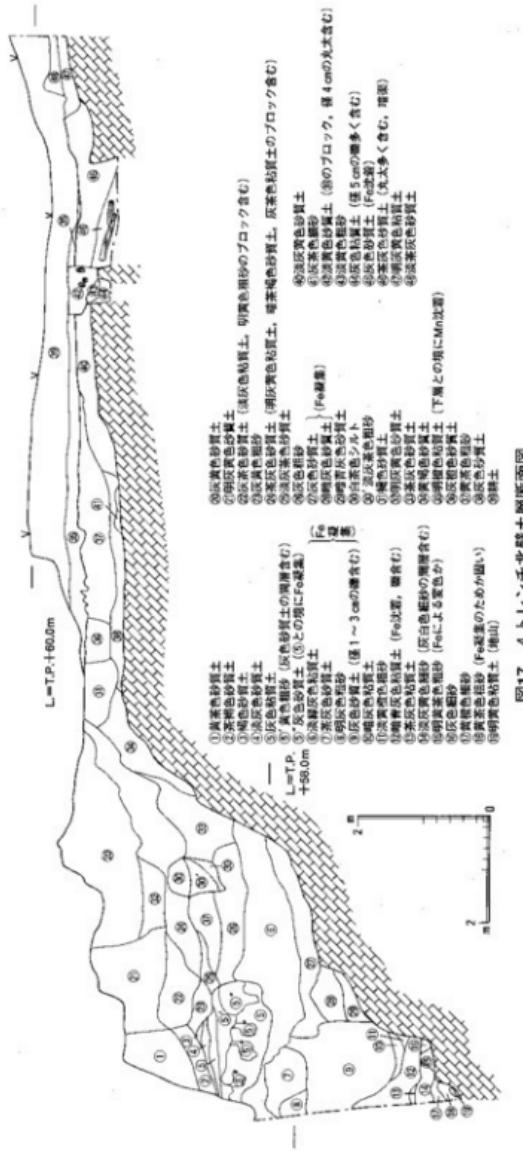


図17 4トレンチ北壁土層断面図

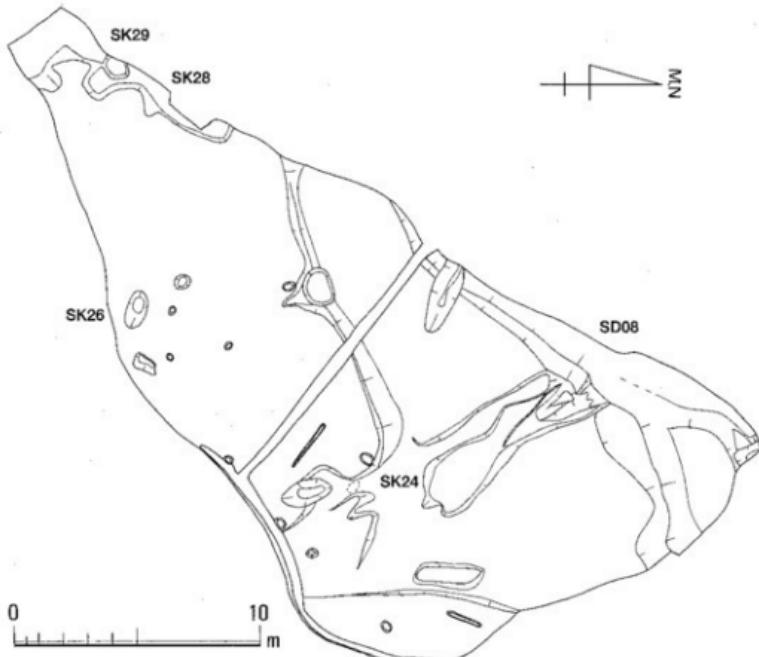


図18 4トレンチ第1遺構面平面図

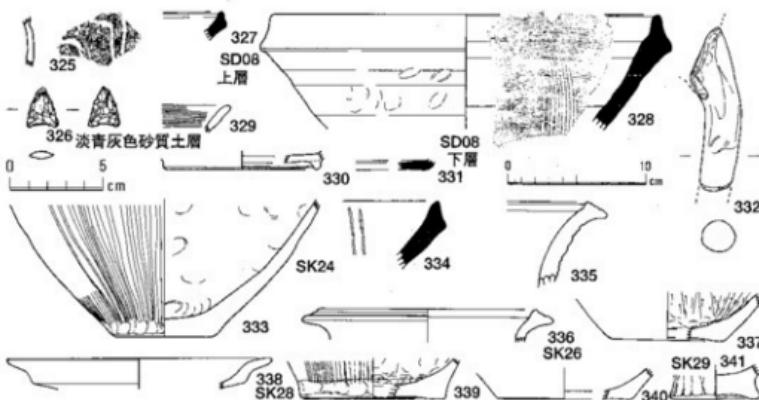


図19 4トレンチ出土遺物実測図

5 5トレンチ

5トレンチは調査区の北東部に位置する。造構面は3面検出した。

第1造構面は現耕作土層下の暗橙色系粘質土層を除いた面である。トレンチ東辺中央から周辺へ傾斜している。レベルは60.0~60.8mである。

埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、埴輪等が出土したが、図示出来るものは無かった。342はサスカイト製の石鋤である。

造構はトレンチ東半で溝、土壤を検出した。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、小片で、少量である。

SD13・14はトレンチ北端で検出した。トレンチを横断して西流する溝である。埋土の堆積状況より、SD14埋没後にSD13が掘削されている。SD13は幅0.3mで、土師器3点が出土した。343は小皿口縁部である。SD14は幅1.3m、深さ0.5mである。弥生土器、土師器、須恵器、埴輪が出土した。344は土師器の鉢口縁部である。345~347は弥生土器底部、348は弥生土器口縁部である。

SD17はトレンチ東辺南半で検出した。幅0.2m、深さ0.1mの南北方向の溝である。弥生土器、青磁が出土した。351は弥生土器底部である。

SP17はトレンチ南部で検出した。径0.2m、深さ0.2m、平面円形のピットである。弥生土器が出土した。352は高杯底部、353は高杯脚部である。同一個体のものかもしれない。

第2造構面は灰色系砂質土層を除いた面である。上面と同様、トレンチ東辺中央から周辺へ傾斜している。レベルは59.8~60.3mである。

埋土からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、埴輪、石器が出土した。390は縄文土器胴部である。2条の沈線が施されている。後期、福田K2式である。392~394はサスカイト製の石鋤である。395は砂岩製の磨石である。周縁に磨痕が見られる。396・397はサスカイト製の撥形の石鋤である。396は基部中央がややくびれている。刃部は偏刃で、磨

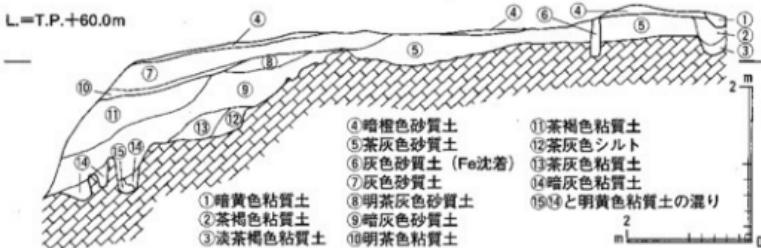


図20 5トレンチ東西断面北壁土層断面図

滅痕が見られる。397もやや偏刃で、磨滅痕が見られる。398はサスカイト製のくさび型石器である。

遺構はトレンチ全面で溝、土壌、ピット、竪穴建物2棟を検出した。埋土からは主に弥生土器が出土したが、少量である。

SB01・02はトレンチ北部で検出した壁体溝をもつ円形竪穴建物である。検出面から床面まで0.1m程度である。壁体溝の切り合いから、径2.65mのSB02が径3.3mのSB01に拡張されている。SB02に伴う壁体溝、SD26より内側の柱穴の埋土に木炭が混じるものがあること、床面が赤変していることから、SB02は焼失した様である。その後、SB02の床面を利用してSB01を築いたのであろう。さらに、SB01は中央穴、SP41に切り合があることから、再度、建て替えたのであろう。

SB01・02からは弥生土器が出土した。354～363はSB01から、364～366はSB02から出土した。354・355は壺の、356は甕の、357・358は鉢の口縁部である。360は高杯部、362・363は高杯脚端部である。364は口縁部、365・366は器台脚端部である。

SB01に伴うSP30からは381の弥生土器口縁部1点が出土した。SD25からは弥生土器が出土した。371は脚部差し込み技法の高杯である。372は口縁部である。SP41からは弥生土器が出土した。385・386は口縁部である。385は壺部の上下に粘土を貼り付け、拡張している。

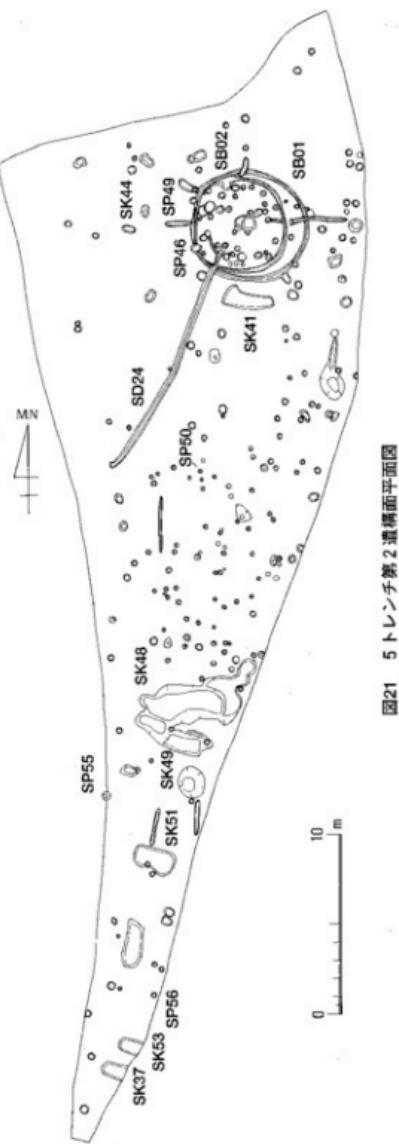


図21 5トレンチ第2遺構平面図

SB02に伴うSP28からは弥生土器が出土した。380は底部である。SD26からは弥生土器が出土した。373はほぼ完形の台付椀である。

SD24はトレーン北半中央で、SB01と切り合って検出した。長さ15m、幅0.4m、深さ0.2mの溝である。弥生土器、石鏡が出土した。367・368はサヌカイト製の石鏡未製品である。369・370は壺口縁部である。

SK37・53はトレーン南部で並行して検出した。調査区外へ延びるため長さは不明だが、幅

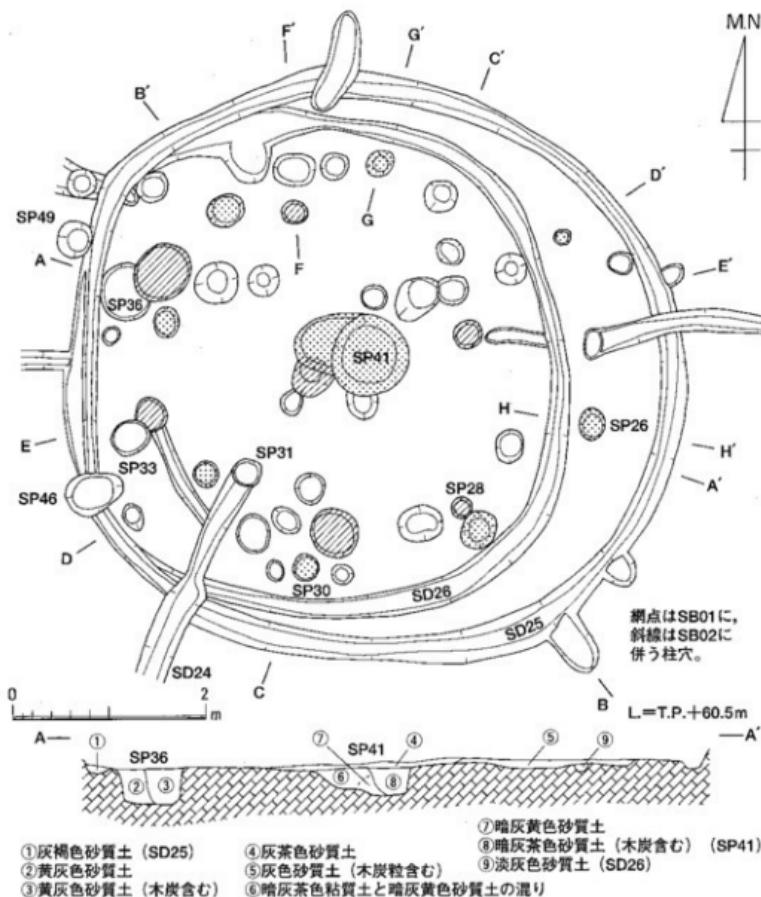


図22 SB01・02平面図・断面図(1)

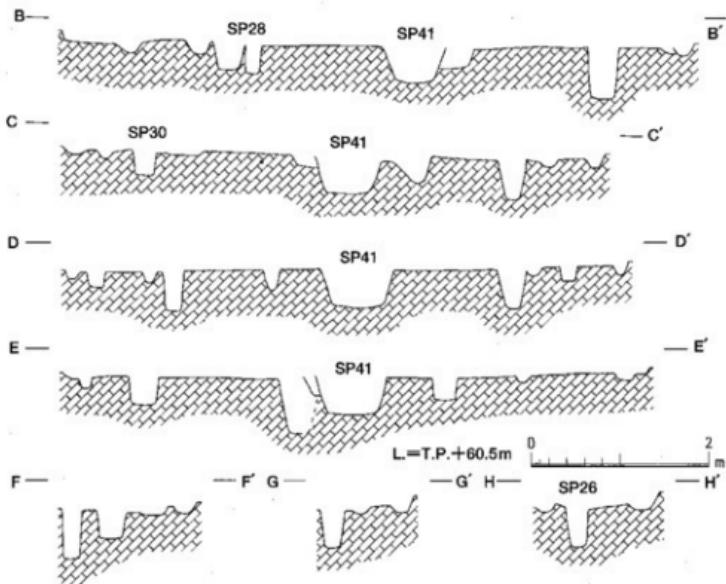


図23 SB01・02断面図(2)

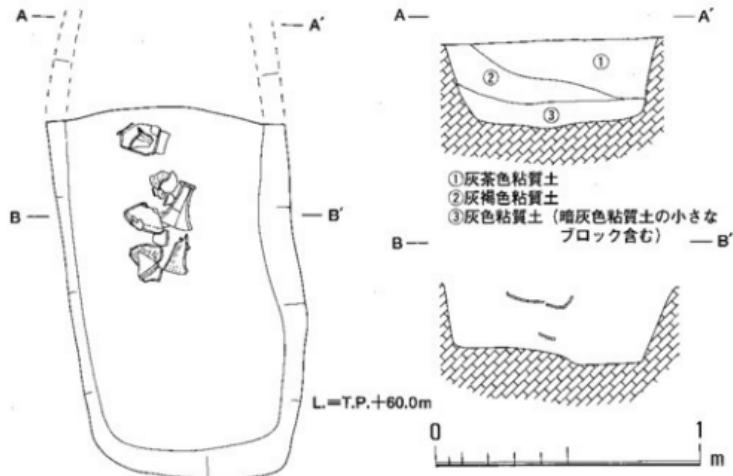


図24 SK37平面図・断面図

0.9m、深さ0.3~0.4m、平面隅丸長方形である。弥生土器が出土した。349・350はSK37から出土した。349は甕である。同一個体であろう。350は円板充填法の高杯である。脚部の透し穴は貫通していない。SK37・53はその形状から土壤墓と考えられる。また、349・350といった土器は浅い所から出土していることから、供獻土器であろう。

SK41はSB01の南で検出した。長径2.8m、短径1.0m、深さ0.1m、平面不定形である。弥生土器が出土した。374は甕口縁部、375は高杯杯部、376~378は底部である。

SK44はSB01の西で検出した。長径0.8m、短径0.4m、深さ0.1m、平面長円形である。縄文土器、弥生土器が出土した。379は高杯杯部である。

SK48はトレンチ中央で検出した。深さ0.4m、平面不定形の落ち込みの一部である。弥生土器が出土した。391は底部である。

SK49はSK48に隣接して検出した。深さ0.3m、平面不定形の落ち込みの一部である。弥生土器、405の須恵器1点が出土した。399はほぼ完形の甕である。400・401は口縁部である。400の端面には刻み目が施されている。401の端部は上方に折り曲げられ、端面には3条の凹線の後、刻み目が施されている。402・403は甕底部である。404は高杯脚端部である。405は底部である。底面には糸切り痕が残存している。406は手づくねの小型土器である。

SK51はトレンチ南半中央で検出した。長径2.3m、短径1.2m、深さ0.4m、平面不定長方形である。弥生土器が出土した。407は口縁部である。縁部は外方に粘土を貼り付けて拡張され、外面には残存部で4条の突帯をもつ。

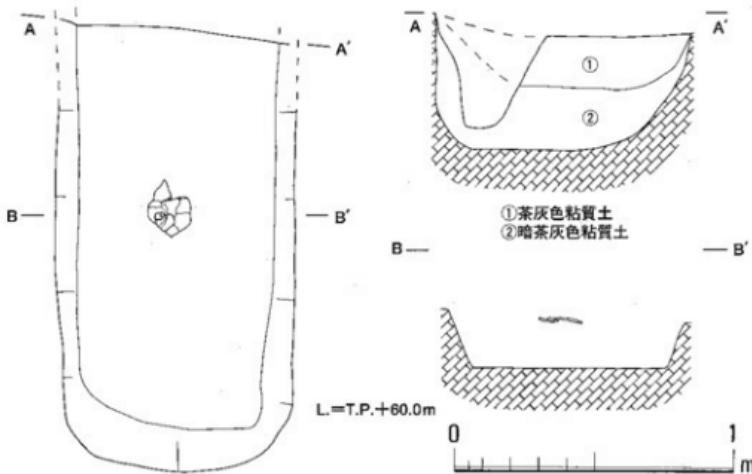


図25 SK53平面図・断面図

SP31・33・36はSB02内で検出した。

SP31は径0.7m, 深さ0.6m, 平面ほぼ円形である。弥生土器3点が出土した。**382**は甕口縁部である。端部は外方に拡張され、端面には凹線文が施されている。

SP33は径1.0m, 深さ0.4m, 平面ほぼ円形である。縄文土器、弥生土器が出土した。**383**は弥生土器口縁部である。

SP36は径1.0m, 深さ0.4m, 平面ほぼ円形である。弥生土器が出土した。**384**は甕上半部である。口縁部は外方に折り曲げられ、端部は斜め下方に拡張されている。

SP46はSB01の南西部で切り合って検出した。長径1.6m, 短径1.1m, 深さ0.4m, 平面卵形である。**387**の縄文土器口縁部1点が出土した。端部は丸く納められ、内面に沈線が1条見られる。

SP49はSB01の北西部で切り合って検出した。径0.9m, 深さ0.3m, 平面円形である。弥生土器3点が出土した。**388**は口縁端部である。

SP50はトレンチ中央で検出した。径0.2m, 深さ0.1m, 平面円形である。**389**の弥生土器口縁部1点が出土した。端部はやや肥大し、端面には刻み目が施されている。

SP55はトレンチ西辺南半で検出した。径0.4m, 深さ0.4m, 平面円形である。弥生土器3点が出土した。**408・409**は口縁部である。

SP56はトレンチ南東部で検出した。径0.3m, 深さ0.3m, 平面円形である。弥生土器4点が出土した。**410**は口縁部である。端部は外方に拡張され、端面には凹線文が施されている。**411**は底部である。

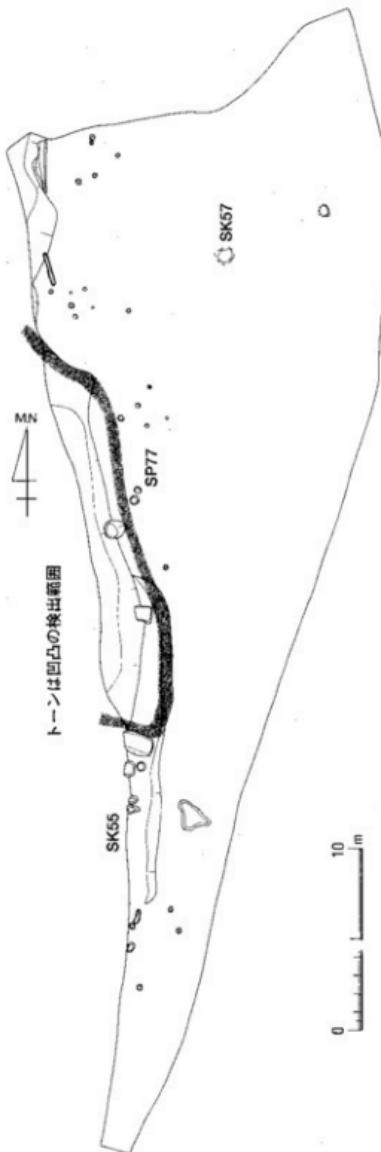
第3遺構面はトレンチ西半に堆積していた暗灰色砂質土層を除いた面で、地山面である。西へ傾斜し、西辺は大きく落ち込んでいる。レベルは59.6~60.1mである。

埋土からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、石器、鉄滓が出土した。**412**はサヌカイト製の石錐である。頭部が欠損している。**413**はサヌカイト製の石錐未製品である。

遺構はトレンチ全面で土礫、ビットが散在して検出された。埋土からは弥生土器が出土したが、少量である。

凹凸としたのは、2・3トレンチ第4遺構面で検出したのと同様のものである。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪が出土した。**414~419**は弥生土器である。**414~417**は口縁部である。**414・415**の端部は拡張され、端面には凹線文が施されている。**416**の端部は折り返して拡張され、端面には刻み目の後、凹線文が施されている。**418**は高杯脚端部である。外面には凹線文が施され、丹塗りがなされている。**420・421**は須恵器口縁部である。**421**の端部は受け口状に大きく外反している。

SK55はトレンチ西辺南半で検出した。長径0.7m, 短径0.5m, 深さ0.2m, 平面洋梨形である。



弥生土器 3 点が出土した。422は壺口縁部である。端部は上下に拡張され、端面には 3 条の凹線の後、刻み目が施されている。

SK57はSB01の下層で検出した。長径 1.0m、短径 0.8m、深さ 0.2m、平面隅丸台形である。縄文土器、弥生土器が出土した。423は壺口縁部である。

SP77はトレンチ西半中央で検出した。径 0.4m、深さ 0.3m、平面円形である。弥生土器が出土した。425・426は口縁部である。428は小型の器台脚部であろう。外面には凹線文が施されている。

429はトレンチ西側斜面から出土したサスカイトの剥片である。

図26 5 トレンチ第3 棚縁面平面図

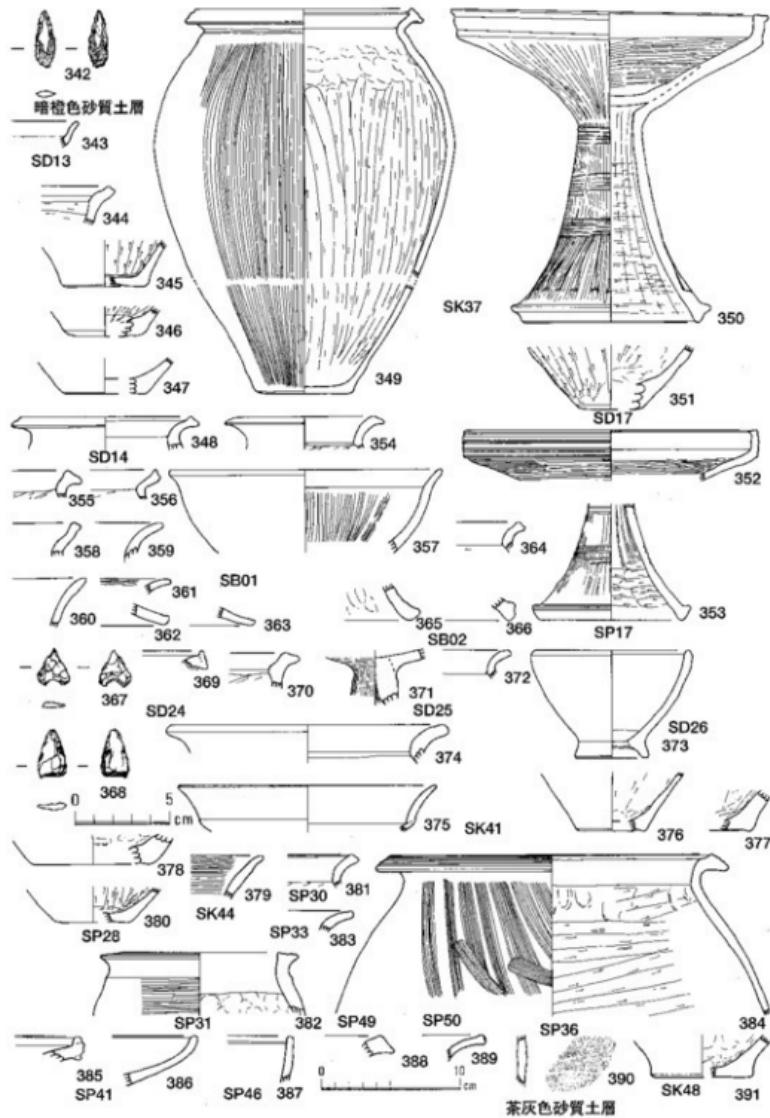


図27 5トレンチ出土遺物実測図(1)

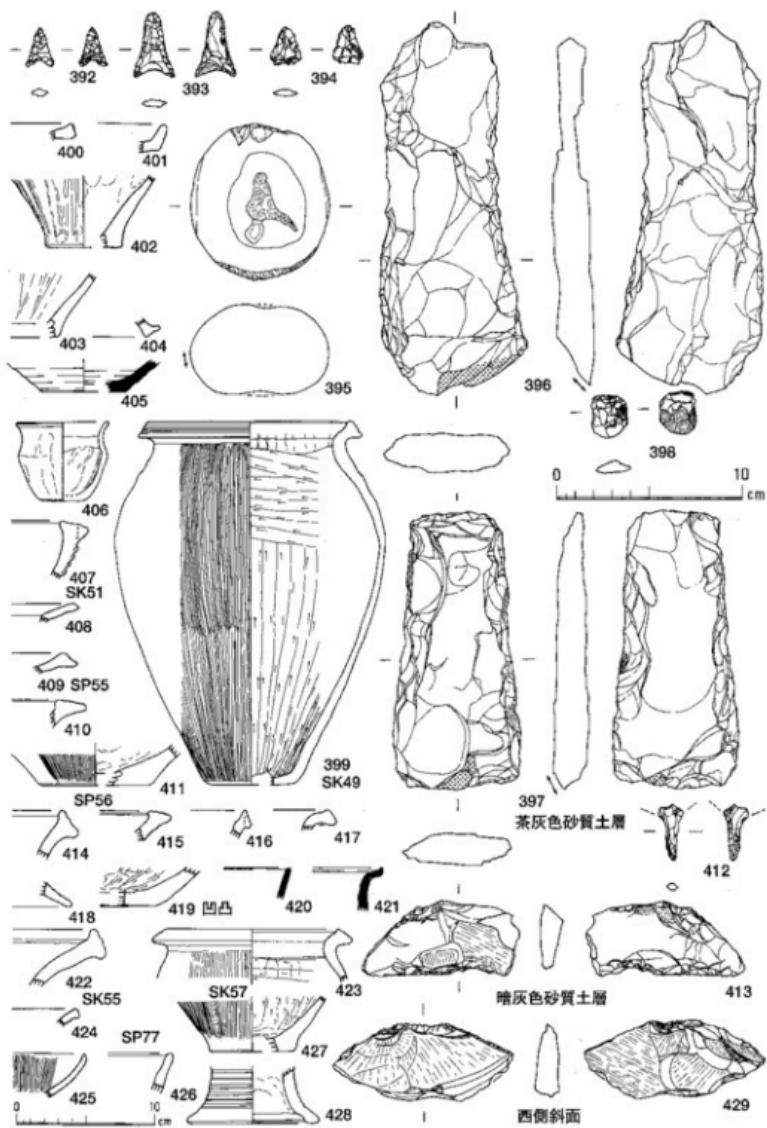


図28 5トレンチ出土遺物実測図(2)

6 6トレンチ

6トレンチは調査地の北東部に位置する。調査範囲では最も高所である。遺構面は2面検出した。

第1造構面は灰茶色系砂質土層を除いた面である。西へ傾斜している。レベルは60.7~61.1mである。

埋土からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、備前焼、埴輪、鉄滓等が出土した。430は縄文土器口縁部である。波状口縁である。端部は丸く肥大し、外面には2条の沈線が山形に施されている。沈線下部には縄文が見られる。内面には条痕が残存している。431は凝灰岩製の砥石である。四面とも使用され、よく磨滅している。432はサスカイトの剥片である。

遺構はトレンチ南半で溝、ピットを検出した。トレンチ北端は北へ落ち込んでいる。埋土からは主に弥生土器が出土した。

SD19はトレンチ中央で検出した。J形に延びる幅0.2m、深さ0.1mの溝である。弥生土器、土師器、須恵器が出土した。433・434は土師器小皿である。435は須恵器底部である。底面には糸切り痕が残存している。436は須恵器腕である。

SD20・21はトレンチ中央で検出した。トレンチを横断して西流する溝である。埋土の堆積状況より、SD21埋没後SD20が掘削されている。SD20は幅0.7m、深さ0.2mである。弥生土器、瓦器、埴輪が出土した。437は弥生土器口縁部である。438は瓦器腕の底部である。高台は低いが、断面四角形を呈する。見込みに暗文が見られる。439は円筒埴輪の基部である。緯刷毛調整が施されている。基底面には工具痕が残存している。SD21は幅1.5m、深さ0.4mである。弥生土器、土師器、須恵器、埴輪が出土した。440・441は弥生土器口縁部である。440の拡張された端部は欠損

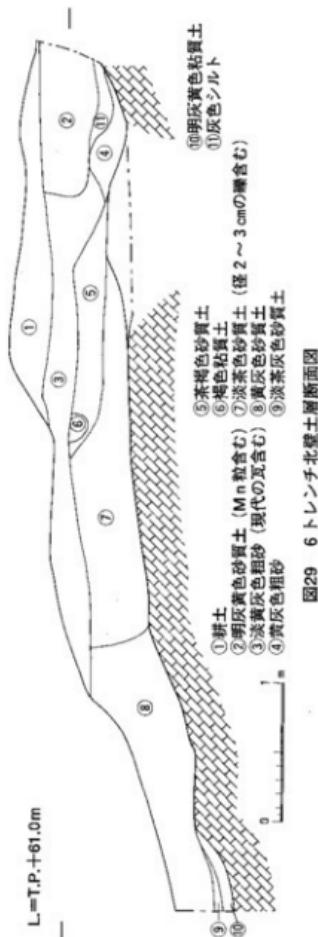


図29 6トレンチ北壁土層断面図

している。441の端部は折り返して拡張されている。442は口縁部である。端部は内傾し、穿孔されている。調整は粗い。443は土師器の壺口縁部である。444・445は底部である。445の底面周囲は高台状に突出し、上げ底になっている。

SD22はSD21の南側で検出した。幅0.4m、深さ0.1mの溝である。弥生土器、土師器、須恵器、446のサヌカイト製の石鏡が出土した。

SP22・24・25はトレンチ東辺南北で検出した。

SP22は径0.4m、深さ0.2m、平面円形である。弥生土器が出土した。447～449は口縁部である。450は高杯脚端部である。

SP24は径0.4m、深さ0.3m、平面円形である。弥生土器が出土した。451は高杯脚端部である。

SP25は径0.3m、深さ0.2m、平面円形である。縄文土器、弥生土器、土師器が出土した。452は土師器の椀口縁部である。

落ち込みはトレンチ北端で検出した。検出した範囲では最深0.4mである。4トレンチで検出したSD08へ続くものかもしれない。遺物は弥生土器が大部分だが、須恵器、備前焼鉢、陶器1点ずつが出土した。453は大型の壺である。口縁端部は折り返して上下に拡張されている。454、455も同様の特徴をもつ口縁部である。456・457は底部である。458～465は口縁部である。458の端部は上下に摘み出して拡張されている。460は土師器の壺口縁部である。461の端部は上方へ摘み上げられている。外面には凹線文が施されている。464・465は土師器であろう。464は椀、465は鉢である。466は器台脚部である。467は高杯脚端部である。2個一組で4ヶ所に穿孔されている様である。468・469は大型の壺口縁部である。端部は上下に拡張されている。469の端面には粘土貼付けによる装飾が見られる。470は復元径に問題はあるが、壺口縁部であろう。端部は斜め下方に折り返して拡張されている。端面にはS字状の浮文が貼付けられ、竹管文が施されている。471・472は器台脚部である。端部は粘土を貼付けて外方に拡張

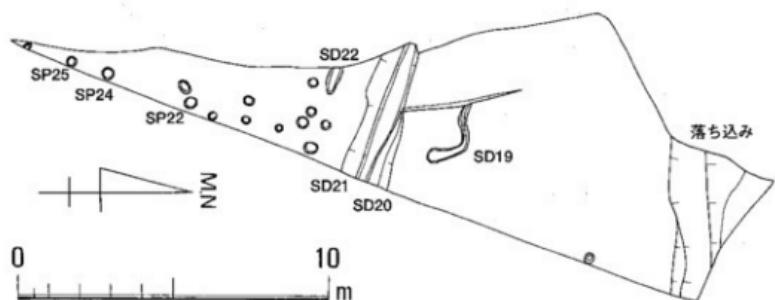


図30 6トレンチ第1構造平面図

されている。装飾は見られない。

第2遺構面は暗褐色系砂質土層、暗灰色砂質土層を除いた面で、地山面である。西へ傾斜している。レベルは60.4~60.8mである。

埋土からは弥生土器の他、土師器皿、須恵器、瓦器碗1点ずつが出土した。473は粘板岩製の磨製石包丁である。全体の半分強の破片である。縁部はよく磨滅している。474はサヌカイト製の石錐である。全体に風化している。475は弥生土器の壺口縁部である。

遺構はトレンチ全面で溝、土壙、ピットを検出した。埋土からは弥生土器を主に、縄文土器、土師器が出土したが、いずれも少量である。

SD29・30はトレンチ中央で検出した。上面のSD20・21の直下である。トレンチを横断して西流する溝である。埋土の堆積状況より、SD30埋没後にSD29が掘削されている。断面観察から、最低5回の掘削が考えられる。埋土等から、5トレンチ第1遺構面で検出したSD13・14に続く溝である。SD29は幅0.5m、深さ0.2mである。弥生土器2点、土師器、須恵器1点ずつが出土した。SD30は幅1.7m、深さ0.2mである。縄文土器、弥生土器が出土した。476・477は弥生土器の高杯杯部である。478は口縁部である。479は縄文土器底部である。480は弥生土器の底部、481は脚部である。

SD31はトレンチ南半中央を東西に貫流する溝である。幅0.2m、深さ0.1mである。弥生土器、土師器が出土した。482は弥生土器口縁部、483は土師器口縁部である。

SD32はトレンチ北東部で検出した溝である。幅0.5m、深さ0.1mである。弥生土器が出土した。484は口縁部である。端部は肥大し、端面には凹線文が施されている。

SK54はトレンチ西辺中央で検出した。長径2.0m、短径0.9m、深さ0.5m、平面不定形で、底面は2段に落ち込む。縄文土器、弥生土器が出土した。485・486は口縁部である。485の端部は斜め下方に引き出されている。486の端部は受け口状に大きく外反する。487は底部である。488は脚台部である。成形時の圧痕が残存し、底面もいびつである。

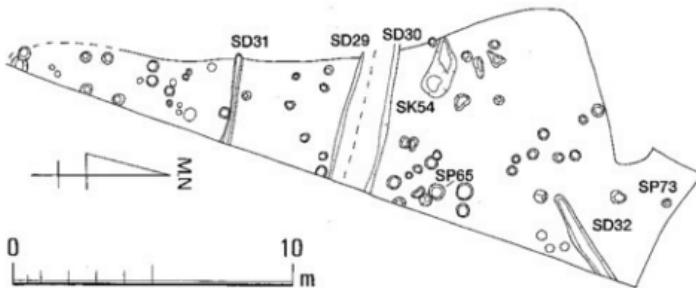
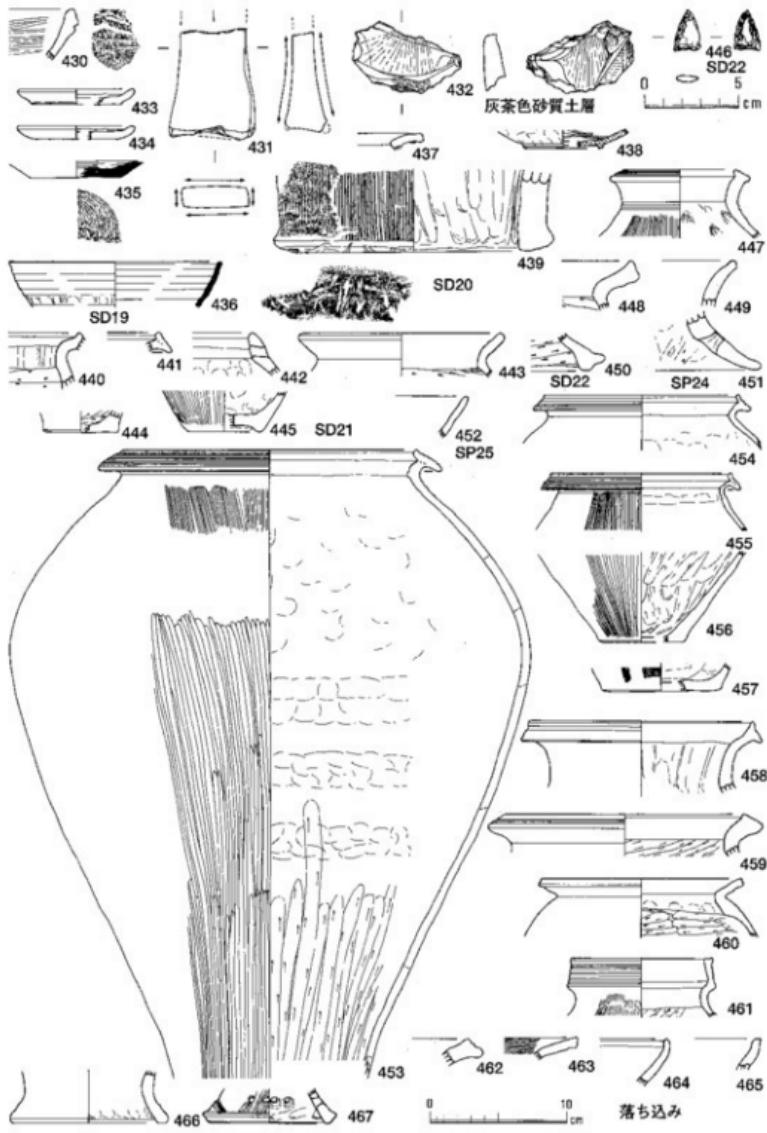
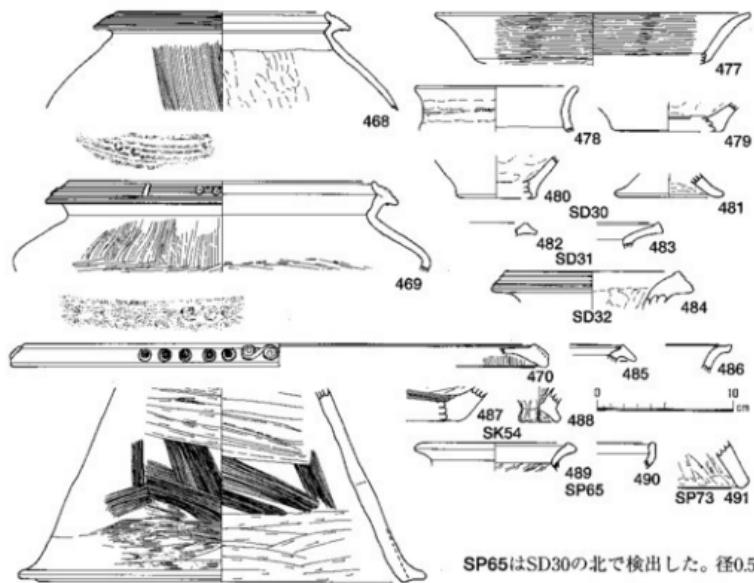


図31 6トレンチ第2遺構面平面図





SP65はSD30の北で検出した。径0.5

m、深さ0.2m、平面円形である。

489・490の口縁部2点が出土した。

SP73はトレンチ北端で検出した。

径0.3m、深さ0.1m、平面円形である。

弥生土器2点が出土した。491は器台
脚端部である。



縄文土器、石器については平井勝氏（岡山県教育委員会文化課）からご教示を頂いた。

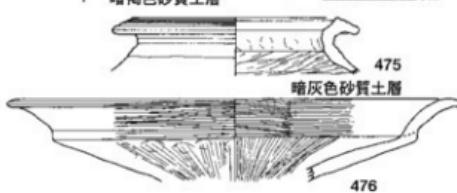


図33 6トレンチ出土遺物実測図(2)

IV まとめ

前章までに述べてきた様に、各トレンチとも遺構の年代は入り乱れ、残存状況も悪い。ほぼ同一レベルで長年に亘り利用されてきた結果である。

十分な検討を加えていないので、詳しいことは言えないが、目に付いた遺構について述べてみたい。縄文時代後～晩期の土器が出土したが、その時期に比定出来る遺構は見られない。1トレンチは近年まで新庄川の氾濫原のためか不安定だった様で、積極的に利用された様子は何えない。2・3トレンチより上位のレベルになると人々の活動の痕跡が見られる。5トレンチで検出したSB02は弥生時代後期後葉、SB01は後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられよう。多数のビットを検出したが、建物等としてまとまりのつかめるものは無かった。集落の主体は現在の集落の下に眠っているのであろう。5トレンチで検出したSK37は弥生時代後期前葉、2トレンチで検出したSK10は後葉に位置付けられよう。これらと、SK37に隣接して検出したSK53は墓と考えられる。5トレンチが居住域であった時は、墓域は5トレンチから2トレンチへ、下段へ移動していた様である。古墳時代以降、現代に至るまで、調査地は主に耕作地として利用されていたのであろう。圃場整備前の状景は千数百年前の姿を伝えていたのだろうか。

今回の調査で検出した遺構のうち、その性格が不明なものが、2・3・5トレンチの境附近で検出した『凹凸』と名付けたものである。湿地に密集して残された足跡の様なものである。しかし、調査時にその部分が軟化している様でもなかった。類例を待ちたい。

また、調査地全域で円筒埴輪片が出土した。磨滅しているものが多いが、綴刷毛調整が見られる。突帯は断面台形を呈するが、溶けた様に低く、接合時の調整も粗い。川西宏幸氏の編年[※]で第V期に付置付けられよう。動物埴輪の脚部らしい物も出土している。調査地背後の松撫山から派生する尾根上に古墳が築かれていたのだろうか。

現在、かつての調査地は圃場整備が完了し、様相は一変している。鎌治屋谷遺跡の調査記録である本書では、出土土器のうち口縁部、底部等特徴的な物は出来る限り掲載した。そのため、小片が羅列してあるだけと見受けられる部分があるかもしれない。ご理解願いたい。

最後に思うところを述べてみたい。発掘調査によって、円形あるいは方形の窪みの中にビットをもつ遺構が検出される。また、史跡公園等でカヤ葺き屋根の屋根だけを地面に置いた様な建築物が見られる。これらは『竪穴住居』と呼称されている。しかし、当時の人々はこの遺構を住居としてだけ利用していたのであろうか。恐らく、工房、倉庫等としても利用していたはずである。よって、本書においては竪穴住居という名称を使用せず、竪穴建物としている。

※川西宏幸 1978「円筒埴輪他論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会



図版1 調査地遠景（西から）



図版2 調査地近景（北西から）



図版3 1トレンチ第1造構面（北から）



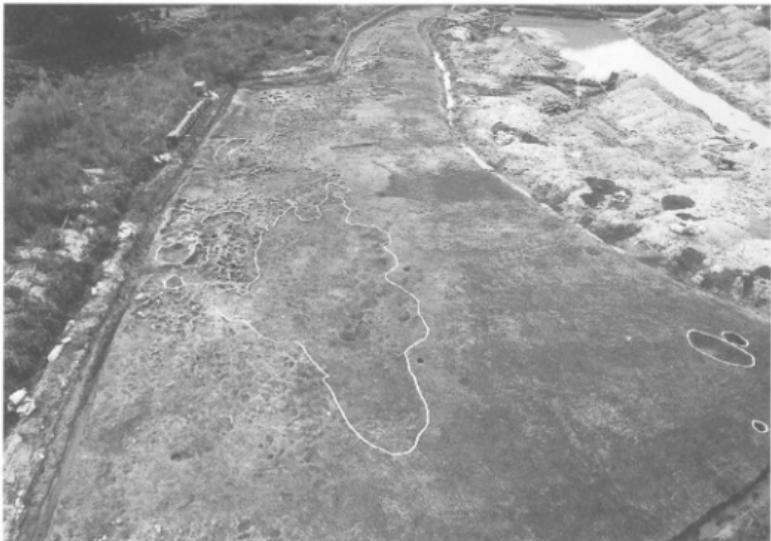
図版4 1トレンチ第1造構面（南から）



図版5 2トレンチ第3遺構面（北から）



図版6 3トレンチ第3遺構面（北から）



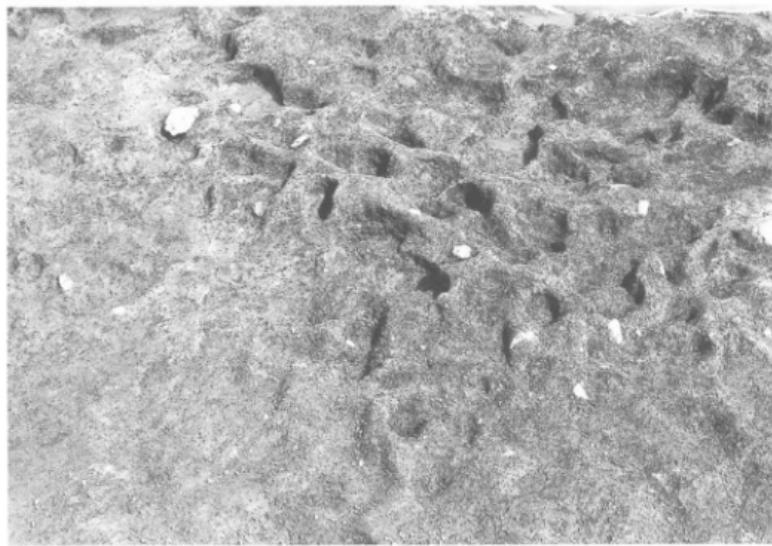
図版7 2トレンチ第4遺構面（北から）



図版8 3トレンチ第4遺構面（北から）



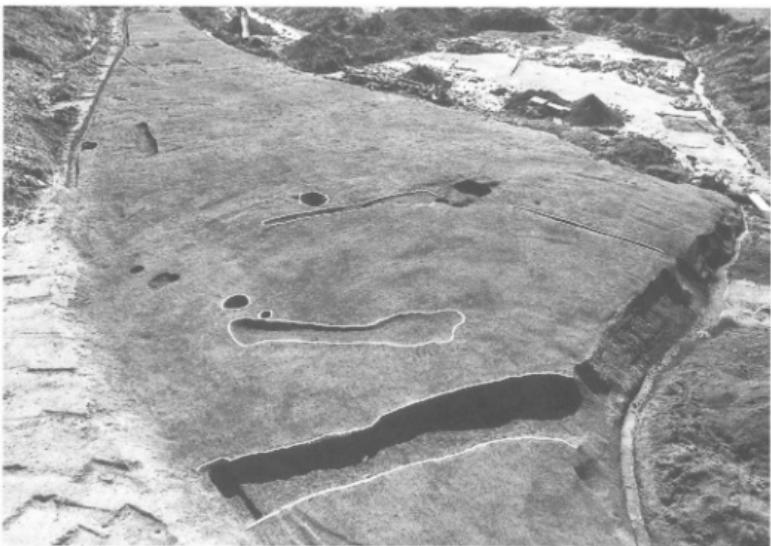
図版9 2トレンチSK10土器出土状況（西から）



図版10 2トレンチ凹凸（西から）



図版11 4トレンチ第1遺構面（南から）



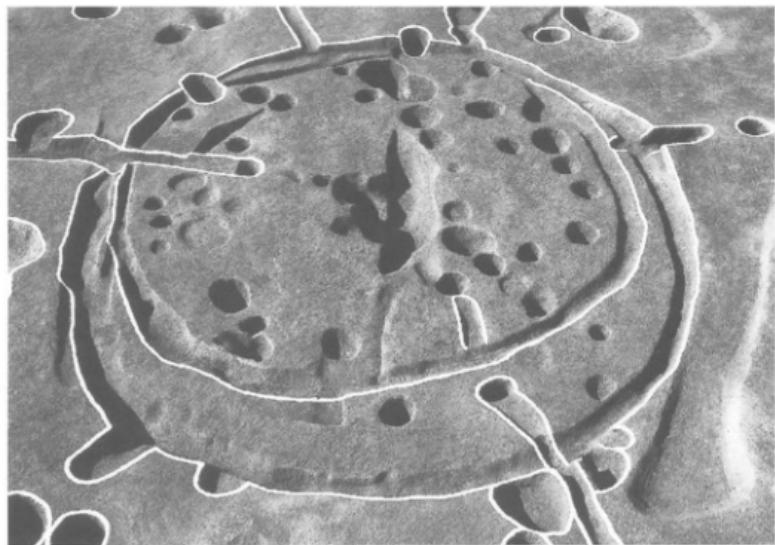
図版12 5トレンチ第1遺構面（北から）



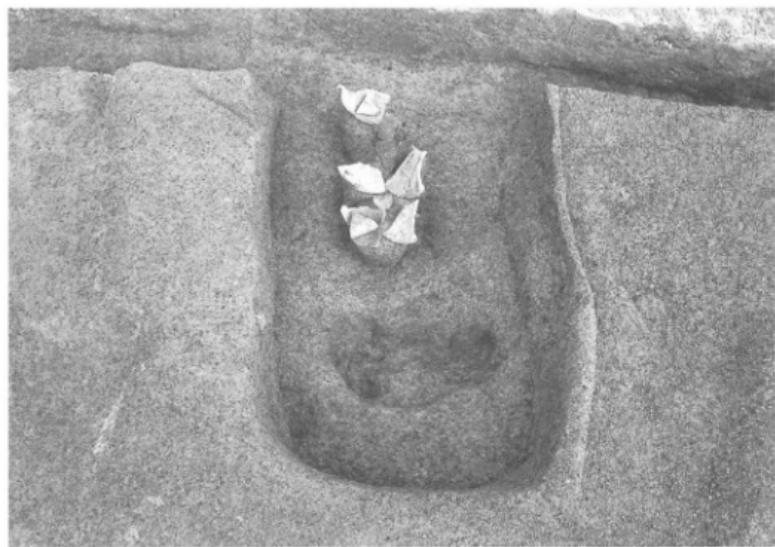
図版13 5トレンチ第2遺構面（北から）



図版14 5トレンチ第3遺構面（南から）



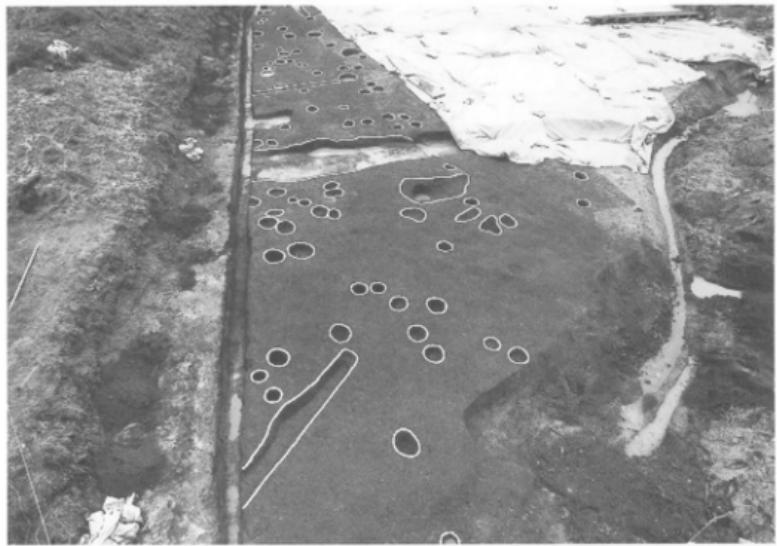
図版15 5トレンチSB01・02（東から）



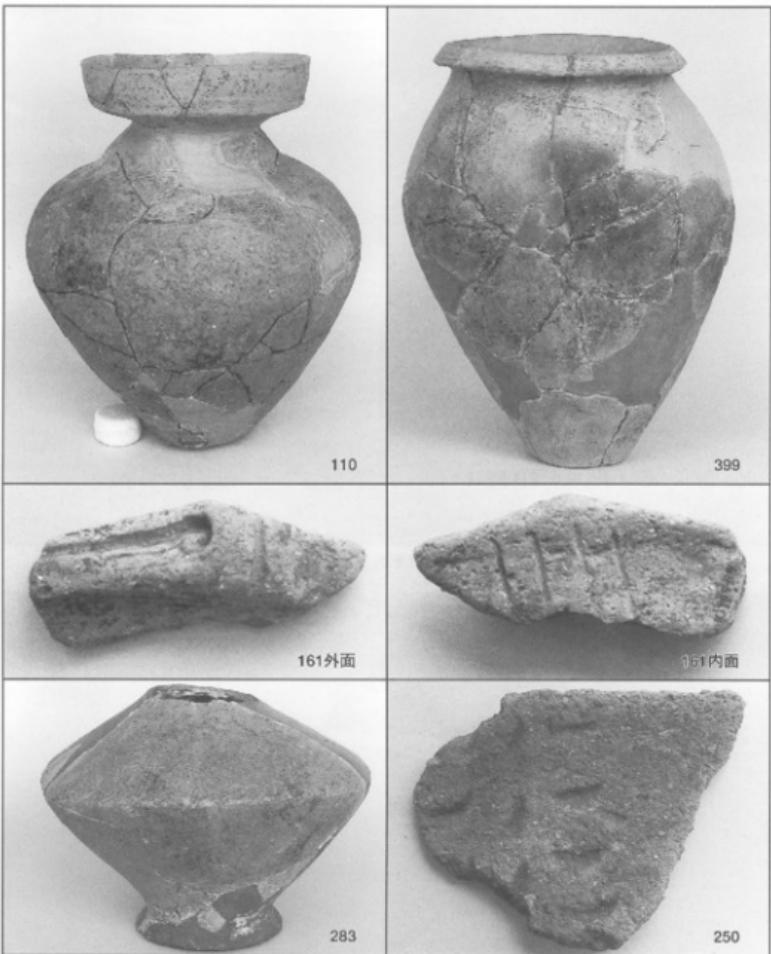
図版16 5トレンチSK37土器出土状況（西から）



図版17 6トレンチ第1遺構面（北から）



図版18 6トレンチ第2遺構面（北から）



图版19 出土遗物(1)



图版20 出土遗物(2)

報告書抄録

ふりがな	かじやだにいせき
書名	鍛冶屋谷遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	御津町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	9
編著者名	長谷川一英
編集機関	御津町教育委員会
所在地	〒709-2121 岡山県御津郡御津町字垣1629 TEL 0867-24-1711
発行年月日	西暦 1998年 3月 31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
鍛冶屋谷遺跡	岡山県御津郡 御津町 大字 新庄 字除地	33301	—	34度 48分 53秒	133度 58分 21秒	19890627 ~ 19891124	4,000	開場整備に伴う事前調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶屋谷遺跡	集落 墓	弥生	墳穴建物 2軒 土塁墓 2基 壺棺墓 1基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器	縄文から近世までの複合遺跡 縄文の遺構はなし

御津町埋蔵文化財発掘調査報告書

鍛冶屋谷遺跡

1998年3月31日発行

発 行 岡山県御津町教育委員会
岡山県御津郡御津町字垣1629

印 刷 西尾総合印刷株 横井支店
岡山市横井上90